

澤城跡第2次～4次発掘調査報告書

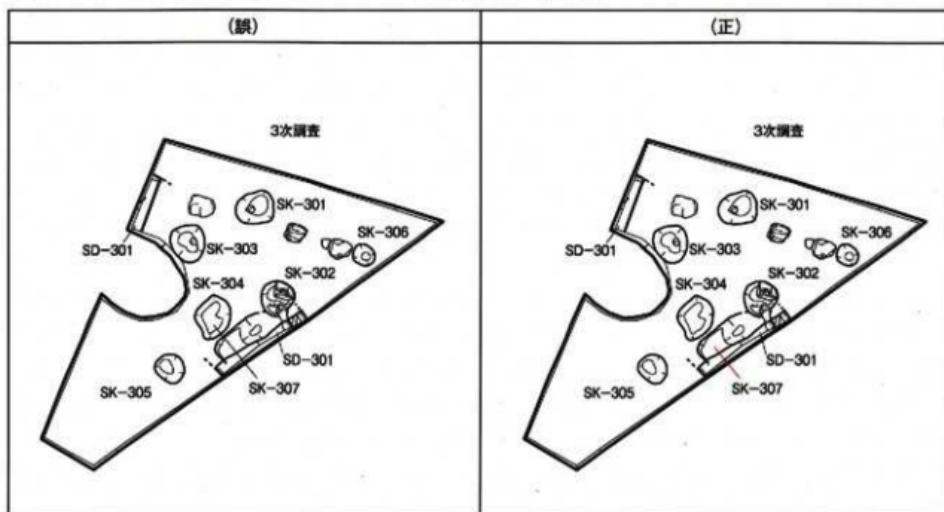
宇陀市文化財調査報告書 第2集

2011

宇陀市教育委員会

澤城跡第2～4次発掘調査報告書 正誤表

本文P.21 図13澤城跡（第2次調査第1トレンチ・第3次調査）遺構平面図

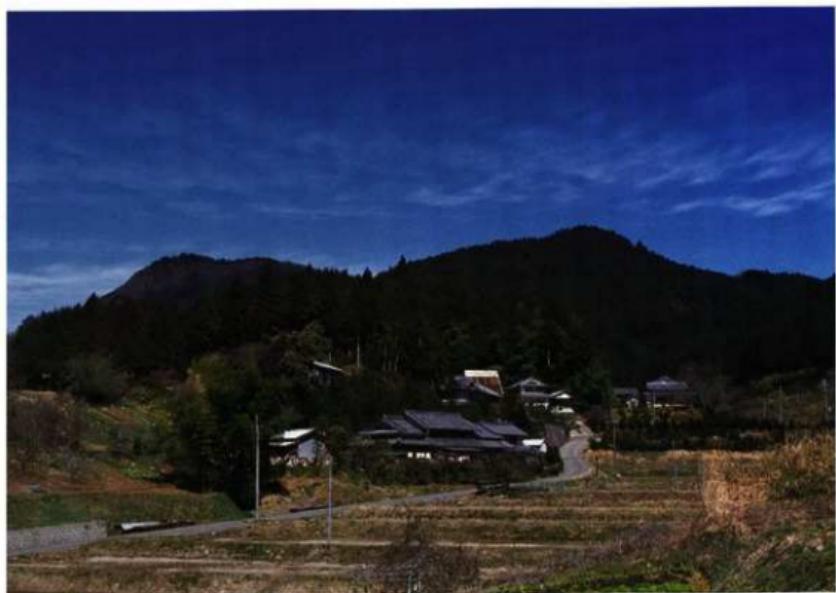


澤城跡第2次～4次発掘調査報告書

宇陀市文化財調査報告書 第2集

2011

宇陀市教育委員会



伊那佐山と澤城跡（下城・馬場遺跡から）



2次調査第1トレーニング構造検出状況

例　　言

- 1 本書は、2003年（平成15）度～2008年（平成20）度にかけて株原町教育委員会（当時）及び宇陀市教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「澤城跡（第2次～4次）」の発掘調査報告書（宇陀市文化財調査報告書 第2集）である。
- 2 発掘調査（現地調査）は、2004年3月10日に着手し、2008年（平成20）11月20日に終了した。以降、断続的に遺物整理等を行い、本書の刊行を2010年（平成22）度事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、宇陀市教育委員会文化財保存課 課長補佐 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「II 調査の契機と経過」に掲載している。
- 5 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いている。なお、平成14年4月1日施行の測量法改正により、測量の基準が日本測地系から世界測地系になっているが、本書では、これまでの遺跡測量成果等の都合上、日本測地系によっている。
- 7 土層の色調は、『新版標準土色帖』2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 8 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 9 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I 位置と環境	1
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
II 調査の契機と経過	11
1 調査の契機と経過	
2 調査組織等	
III 澤城跡第2次・3次調査	14
1 調査区と基本層序	
2 検出遺構	
3 出土遺物	
IV 澤城跡第4次調査	39
1 調査区と基本層序	
2 検出遺構	
3 出土遺物	
V 小結	45
1 澤城と周辺の城	
2 城下の様相	
3 澤城への道	
4 屋敷、寺院と墓地	

図 版

報 告 書 抄 錄

I 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、宇陀市（大宇陀区、榛原区、菟田野区、室生区）、曾爾村、御杖村からなる。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称され、宇陀市の西半がこの口宇陀に含まれている。

口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

宇陀郡の四周はほとんどが山に囲まれており、東が三重県へと続く高見山地、西が大和盆地と宇陀とを区切る音羽山、龍門岳などが連なる龍門山地となっている。南は吉野と接し、関戸峠を越えると紀伊半島を東西に走る中央構造帯を流れる吉野川流域へと至る。北は五条から桜井、榛原を経て伊賀へと続く近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷が認められる。この構造谷の北側は急傾斜の断崖となっており、大和高原とを区切る額井岳（通称 大和富士）、香醉山、貝ヶ平山、鳥見山などの山々が屏風状に形成され、宇陀の地を見下ろしている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地、谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、宇陀市榛原区でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は室生川をあわせて北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが奈良盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。この宇陀川の本流は大宇陀区宮奥の谷に発し、黒木川、本郷川、中山川などの小支流をあわせて、榛原区へと至っている。一方、関戸峠を越えた大宇陀区大蔵、栗野などの地区は吉野川の支流である津風呂川の上流域となっている。芳野川は菟田野区岩端を源とし、宇太水分神社の南を流れ、榛原区下井足で宇陀川と合流する。芳野川流域と吉野川流域との分水界は、現在も市村界でもある佐倉峠の山系となっている。また、宇陀川と芳野川との間には吉野の山塊から延びてくる標高320～430mの丘陵が横たわり、これらの尾根稜線を境として、現在の大宇陀区と榛原区、菟田野区との行政区画としている。

これらの地形に沿って古くから様々な交通路が発達し、宇陀地方は大和と伊賀、伊勢そして東国とを結ぶ重要な役割を果たしている。現在の主要交通路は、近江・伊賀大断層沿いの桜井市朝倉、初瀬、榛原区萩原、山辺三、室生区大野を通る国道165号線や近鉄大阪線となっており、かつては、伊勢街道（初瀬街道）、青越道などと呼ばれた道である。現在、榛原区の市街地が行政・交通の中心的な役割を担っているが、この様相は鉄道が開通した近代以降のことであり、近世以前にはいくつもの道が宇陀を縦横に走り、それぞれが重要な位置を占めていた。

奈良盆地と宇陀とを結ぶ道は、北から西峰、女寄峠、半坂の



図1 宇陀市位置図

小峠、上官奥の大峠を越えるルートが知られており、桜井市忍坂、栗原の谷部を経て小峠を越える半坂越が中心的な役割を果たした。西峠越が国道 165 号線、女寄峠越が国道 166 号線となって現在も主要道としての役割を担っている。また、口宇陀を縦断するかのように南北にいくつもの主要道が走り、北へとすると樺原を通る伊勢街道を横断し、香醉峠を経て奈良市都祁町などが位置する大和高原へと至る。南の関戸峠や佐倉峠を越えると、もうひとつの伊勢街道（高見越）へと通じ、関戸峠を越えた三茶屋から南は東熊野街道にもつながる。東への道は青越道のほかに、石割峠を越える伊勢本街道、現在は国道 369 号線となっている開路（石楠花）、梅坂峠を越えるルートなどがある。

口宇陀には縦横、東西南北の各方面に触手のように道がのび、「壬申の乱」の際、大海人皇子の一行が吉野から宇陀を経て、伊賀へと進んでいったことからも明らかのように、この地域は交通の要衝とし重要な位置を占めている。これらの古代からの道は、国道、県道、町道等に姿を変えているものの、今もその占める役割は変わらない。

2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。また、宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献にも度々登場し、今に伝える地名、伝承等も多い。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、坊ノ浦遺跡や高井遺跡では、掘立柱建物跡や素掘溝などを確認している。この頃から台頭してくる地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。

鎌倉時代には、春日社・興福寺はそれぞれの所領を宇陀にも多く持ち、その庄官として地元の土豪たちが任用される。このなかでも秋山・澤・芳野の三氏が台頭、やがて武士化し、彼らは宇陀を代表する勢力となる。秋山氏・澤氏・芳野氏は「宇陀三人衆」とも呼称され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、彼らが活動した口宇陀地域の各所には、小規模な城館も点在している。

正平 8 年（1353）、伊勢国司・北畠氏が宇陀を手中に取ると、三氏をはじめとする地侍は、北畠氏勢力下に置かれることとなる。澤氏は、北畠氏の影響下、大和よりもむしろ伊賀・伊勢へとその勢力を伸ばすこととなる。南北朝期、澤・秋山氏は南朝方（興福寺一乗院方）として、芳野氏は北朝方（興福寺大乗院方）としてその名がみえる。澤氏が本拠とする澤庄は、保延 3 年（1137）には京都・安楽寺院領で、興福寺一乗院が知行し、室町期は興福寺一乗院領となっている（図 2、表 1）。

芳野川を中心とする集団は、澤氏を中心とする武士団として成立し、大永 7 年（1527）の『憲引付』には芳野氏・檜牧・池・大貝・高塚・守道・赤埴・櫻尾氏をはじめとする与力・被官のほか、多くの被官衆、寺庵、百姓衆などが名を連ねる。『憲引付』によって澤氏一族の周辺部には、同心円的に同名衆・被官衆が取り巻いており、その末端は村の百姓衆にまで及んでいたことがわかる。

また、澤氏は一系統ではなく、時の実力者が惣領となり、武士団全体を統率した。

澤氏が居城とした澤城は、神武天皇即位前記にある「伊那佐の山」に比定されている伊那佐山から南東にのびる標高約 480 m ~ 524 m の山頂に造られた中世山城である。城山と呼ばれている山中には、平坦面・土壘・掘切りなどの遺構が良好な状態で残っている。城は、本丸に相当する主郭群（西郭群）、出丸に相当する副郭群（東郭群）で構成され、南斜面には小規模な郭と考えられる平坦面もある。

澤城は、伊那佐山から南東にのびる尾根を切った二重堀切から大手口をおさえる郭群までの南北約700 m、東西約400 mに及び、東西両端を堀切で遮断された南北約250 m、東西約300 mの郭群が澤城の主要部分となっている。主要部分の東西には、深い堀切があり、東端は三重の堀切となっている。また、主要部分の中ほどにも堀切が認められ、これを境として東西に郭群をわけることができ、主郭（西郭）群は本丸、二の丸等、副郭（東郭）群は出丸、クラカケバ等と呼称されている郭がある（図4・5）。

主郭（西郭）群は、最高所にある東西約40 m、南北約20～30 mのやや不整な長方形を呈する主郭を中心に展開している。北西と北東には、細長い郭がめぐり、主郭と北西郭との斜面は緩傾斜となっている。主郭群は基本的には、土塁が築かれていながら、主郭から北へとのびる尾根先端に形成された郭の北端には、小規模な土塁が認められる。

副郭（東郭）群の中心は、南北約90 m、東西約10～20 mの細長い郭を中心にしており、西側以外の三方を土塁で囲み、東から南にかけて、通路状になった帯郭が廻る。この細長い副郭の中ほどには、小規模な堀切が認められ、南郭と北郭とに分かれる。副郭群北側は、非常に急峻な斜面となっており、三重の堀切とともに副郭群全体が城の東方に対する実戦的な繩張りが見て取れる。

この城の築造時期は明らかでないが、天正13年（1585）頃には廃城となったと考えられている。永禄3年（1560）には、高山飛驒守団書が城主となり、幼少の高山右近もここで過ごし、右近は、この城内の教会で洗礼を受けている（写真8）。現在、見ることができる澤城跡の遺構の大半は、松永久方（高山飛驒守団書）の改修によるものと推定されている。なお、北東には、米山城と呼ばれる郭群、南方の城下（沢・大貝）には居館や小規模な郭群が築かれ、広義の澤城の範囲に含めることができる（写真9）。

澤城跡周辺の関係遺跡（図3）は次のとおりである。

澤中城 尾根上の4箇所に平坦面と南北の2箇所に堀切が認められる。古い様相が描かれており、詳細は明らかでない。

米山城 澤城の北東の尾根上に立地し、広義の澤城の範囲に含まれる。澤城を見下ろすことができる長方形の主郭は、低い土塁で囲まれ、南東隅、北西隅には虎口をもつ。また、城城南西隅にも虎口が認められる。具体的な時期は、明らかでない。

平井城 主郭は三角形を呈し、周囲には土塁を廻らせる。さらにその周囲には横堀、帯郭が認められる。虎口は、沢集落へと向いている。具体的な時期は、明らかでない。

下城・馬場遺跡 沢集落の中央に位置し、現在も小字名に「下城」や「馬場」、「城山口」などが残っている。遺跡は、尾根とその周辺に広がっており、3～4段にわたる平坦面が残っており、5時期に大別できる遺構を確認している。主要建物があったと推定される南北約50 m、東西約35 mの平坦面では、14世紀中葉～15世紀中葉の礎石建物1棟、蔵1棟、ピット等、15世紀後葉～16世紀中葉の礎石建物2棟以上、ピット、土坑等を確認している（写真3）。澤氏の居館跡と考えられる。

その他の居館跡 カジヤ谷遺跡では、尾根上にまとまったピット、土坑が確認され、遺構埋土には焼土、炭を含んでいる。14世紀以降の掘立柱建物の存在が推定されている。沢遺跡では、建物の状況は明らかでないが、土坑、溝、ピットを検出し、13世紀後半～17世紀中葉の遺物が出土している。「小倉前」、「小倉屋敷」といった小字名が残されている。この他、沢集落内には、中世土器が比較的まとまって散布している箇所がいくつか認められるが、いずれも未調査であるため、その詳細については明らかにできない。これは、残念ながらこれまで中世の遺物散布地の発掘調査が十分なされなかった結果でもある。いずれにせよ、これらの遺物散布地は、当時の居住域であった可能性が高い。また、西側の大貝集落内には、



図2 口宇陀地域（大宇陀・猪原・菟田野）の城館跡位置図

表1 口宇陀地域（大宇陀・櫛原・菟田野）の城跡一覧表

番号	奈良県道跡 地図番号	遺跡名	所在地	備考	番号	奈良県道跡 地図番号	遺跡名	所在地	備考
1	103-0040	城場城跡	宇陀市櫛原区山辺三		32	15D-0204	平井城跡	宇陀市櫛原区沢、菟田野区平井	
2	103-0063	山邊堀城跡	宇陀市櫛原区山辺三		33	15D-0256	三宮寺城跡	宇陀市櫛原区三宮寺	
3	103-0066	山邊中城跡	宇陀市櫛原区山辺三		34	15D-0215	見田城跡	宇陀市菟田野区見田	
4	103-0067	山辺西城跡	宇陀市櫛原区山辺三		35	15D-0218	見田・大沢城跡 遺跡	宇陀市菟田野区見田・大沢	
5	103-0068	山辺新城跡	宇陀市櫛原区山辺三		36		オヶ辻城跡	宇陀市大宇陀区オヶ辻	
6	12D-0076	赤瀬城跡	宇陀市櫛原区赤瀬		37	15D-0175	岩清水城跡	宇陀市大宇陀区岩清水、 オヶ辻	
7	12D-0050	福地城跡	宇陀市櫛原区ひの坂1, 2丁目		38	15D-0344	本郷東城跡	宇陀市大宇陀区本郷	
8	15B-0328	笠間城跡	宇陀市櫛原区南瀬、桜井 市吉瀬		39	15C-0152	木桜城跡	宇陀市大宇陀区木桜	
9	103-0073	椿竹城跡	宇陀市櫛原区白明		40	15D-0345	黒木北城跡	宇陀市大宇陀区黒木	
10	103-0100	赤塙下志明城跡	宇陀市櫛原区赤塙		41	15D-0345	黒木西城跡	宇陀市大宇陀区黒木	
11	103-0079	赤塙下城跡	宇陀市櫛原区赤塙		42	15D-0139	治生城跡	宇陀市大宇陀区治生	
12	103-0056	赤塙上城跡	宇陀市櫛原区赤塙		43	18B-0087	黒木東城跡	宇陀市大宇陀区黒木	
13	105-0163	諸木野城跡	宇陀市櫛原区諸木野		44		天子城跡	宇陀市大宇陀区宮奥	
14	103-0102		宇陀市櫛原区赤塙		45	15D-0037	宇陀松山城跡 (秋山城跡)	宇陀市大宇陀区岩清水、 治生	
15	15B-0384	井足城跡	宇陀市櫛原区下井足		46	15D-0352	岩清水南城跡	宇陀市大宇陀区岩清水	
16	15B-0133	上井足城跡	宇陀市櫛原区上井足		47	15D-0201	守道城跡	宇陀市大宇陀区守道	
17	15B-0201	船崎西山城 原内城	宇陀市櫛原区上井足		48		山口等星敷城跡	宇陀市大宇陀区山口	
18	15B-0218	五津城跡	宇陀市大宇陀区五津、椿 原上井足		49	15D-0314	古市場城跡	宇陀市菟田野区古市場	
19	15B-0226	平尾城跡	宇陀市大宇陀区平尾		50		種戸城跡	宇陀市菟田野区種戸	
20	15B-0221	池上城跡	宇陀市櫛原区池上		51	105-0197	福鶴城跡	宇陀市菟田野区福鶴	
21	15B-0322	栗谷トヤシキ 城跡	宇陀市櫛原区栗谷		52	105-0156	芳野城跡	宇陀市菟田野区東頭、下 芳野、宇賀志	
22	15B-0232	福西城跡	宇陀市櫛原区福西、大宇 陀区野依		53		下片岡城跡	宇陀市大宇陀区下片岡	
23	15B-0265	ホングハイ山 道跡	宇陀市櫛原区福西	福西城 道跡	54	18D-0002	牧城跡	宇陀市大宇陀区牧、吉野 郡野町小名	
24	15B-0500		宇陀市櫛原区福西	福西城 道跡	A	103-0038	山辺中村遺跡	宇陀市櫛原区山辺三	山辺氏の 居館跡
25		内原城跡	宇陀市大宇陀区内原		B	103-0078	赤塙下志明遺跡	宇陀市櫛原区赤塙	居館跡
26	15B-0200	小附大谷城跡	宇陀市大宇陀区小附		C	15B-0267	小附大谷遺跡	宇陀市大宇陀区小附	居館跡
27	15A-0259	麻生田城	宇陀市大宇陀区麻生田、 板井市栗原		D	15D-0090	下城、馬場遺跡	宇陀市櫛原区沢	源氏の 居館跡
28	15D-0356	巽の輪城	宇陀市櫛原区比布		E	105-0199	下ノ城遺跡	宇陀市菟田野区下芳野	芳野氏の 居館跡
29	15B-0494	米山城跡	宇陀市櫛原区八瀬		F	15D-0037	秋山下城跡	宇陀市大宇陀区岩清水、 春日、治生	秋山氏の 居館跡
30	15D-0079	澤城跡	宇陀市櫛原区大貝、沢		G	18B-0162	山口等星敷遺跡	宇陀市大宇陀区山口	居館跡
31		澤中城跡	宇陀市櫛原区沢		H	18D-0001	牧下城跡	宇陀市大宇陀区牧	牧氏の 居館跡

大貝氏の名を刻む天文 17 年（1548）年銘の地蔵石仏があり、大貝氏の居館の存在も伝えられている。常念寺跡 詳細は明らかでないが、五輪塔等の石造物が点在している。紀年銘があるものでは、永仁三年（1295）銘の五輪塔（地輪）、宝暦 5 年（1755）銘の如意輪観音像、天保 2 年（1831）年銘の仏足石（写真 1）などがある。また、常念寺旧藏品として天正 9 年（1581）の仏涅槃図、李朝時代（15 世紀末～16 世紀初頭）の地蔵十王図が沢自治会に伝わる。当寺は少なくとも 13 世紀から 19 世紀までは存続していたと推定される。

延命寺跡 数棟の掘立柱建物跡となるピット群、井戸、溝、土坑、墓などが検出されている。詳細が報告されていないため全容が明らかでないが、14世紀～15世紀の遺物が出土している。大永7年（1527）の「櫻引付」に名が残る。

岡寺 古義真言宗に属し、現在も十一面觀音立像を本尊としている。詳細は明らかでないが、大永7年(1527)の「拂引付」に名が残る。

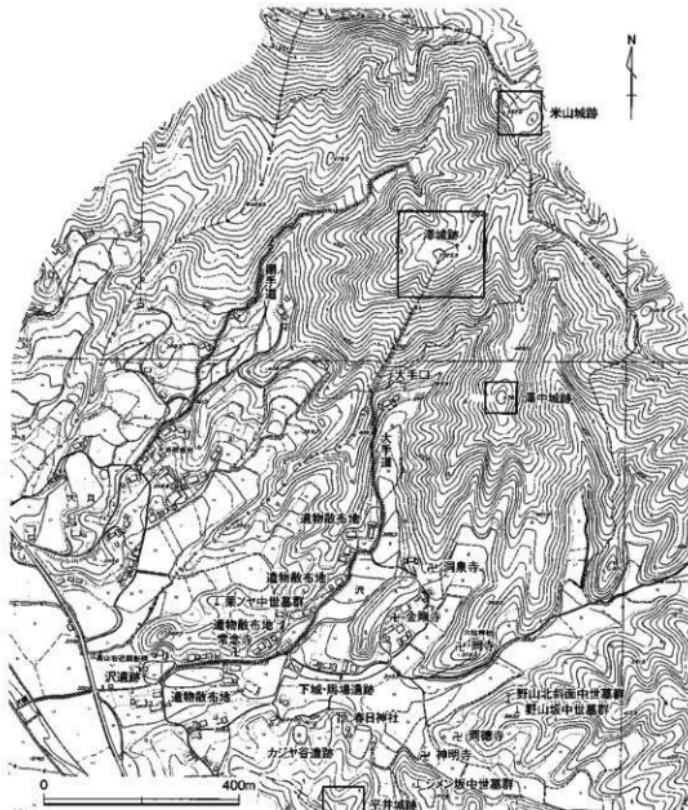


図3 潜域跡と周辺関係遺跡位置図

神明寺跡 シメン坂中世墓群下の谷奥部分に位置する。沼状遺構、五輪塔集積が確認されている。建物遺構については、検出されていないが、13世紀中葉～14世紀、16世紀、18世紀後葉～19世紀の遺物が出土している。

両徳寺跡 野山北斜面中世墓群がある尾根に位置する。掘立柱建物跡を構成するピット群、池状遺構、土坑、石敷、井戸、石室（墓）などが検出され、15世紀～16世紀の遺物が出土している。

洞泉寺跡 詳細は明らかでないが、山裾にいくつかの石造物が並ぶ。永禄12年（1569）銘の五輪塔（写真2）がある。

金剛寺跡 詳細は明らかでなく、近世寺院の可能性も考えられる。

春日神社 創祀など、その詳細は明らかでないが、澤庄の領主とのかかわりが推定できる。明治24年（1891）の「寺院明細帳」には春日造の本殿が描かれている。現在、春日神社は、故地を離れ、六柱神社の境内社となっている。

シメン坂中世墓群 尾根上に単独で位置する中世墓（土葬墓）と48基が密集する中世墓群（火葬施設、火葬収骨墓、土葬墓）とに分かれる。前者は銅鏡を副葬し、13世紀後葉～14世紀初頭の造墓、後者はほとんど副葬遺物を持たず、13世紀後葉～15世紀、17世紀の造墓である。

野山中世墓群 尾根上に8基の中世墓（土葬墓、火葬施設）が点在している。土葬墓からは、青磁碗、刀子、荷絆蓋物が出土している。造墓時期は13世紀後半～14世紀中葉である。

野山北斜面中世墓群 尾根北斜面に34基の中世墓（火葬収骨墓27基、石組7基）が密集する。火葬収骨墓の大半は有機質骨蔵器が用いられており、須恵器（魚住窓）を用いたものは1基のみである。造墓時期は13世紀中葉～14世紀前葉である。

栗ノヤ中世墓群 16基の中世墓（土葬墓、火葬骨収骨墓、火葬墓）が確認されている。造墓時期は15世紀後半～16世紀と考えられている。



写真1 常念寺跡 仏足石（天保2年銘）



写真2 洞泉寺跡 五輪塔（永禄12年銘）



写真3 下城・馬場遺跡（第8次調査）

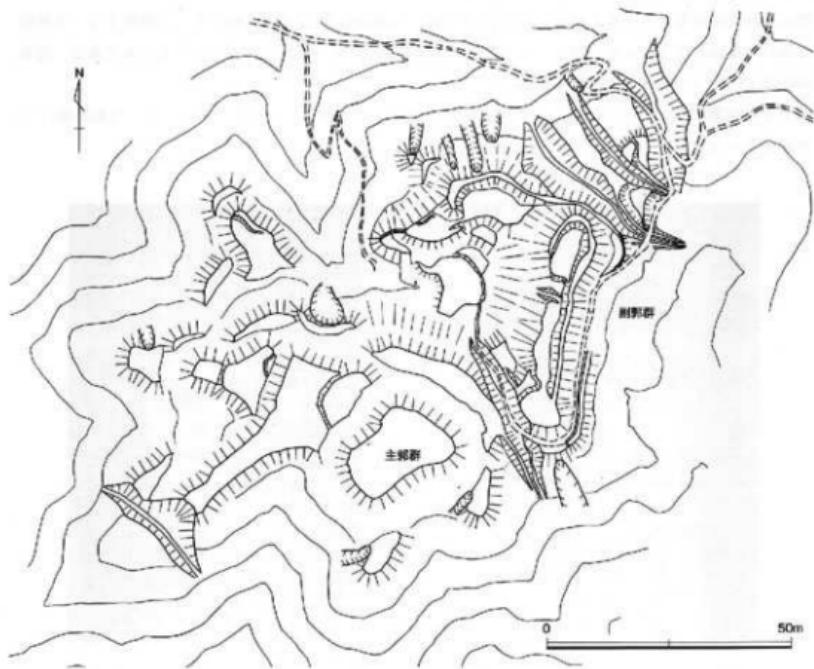


図4 潭城跡跡圖

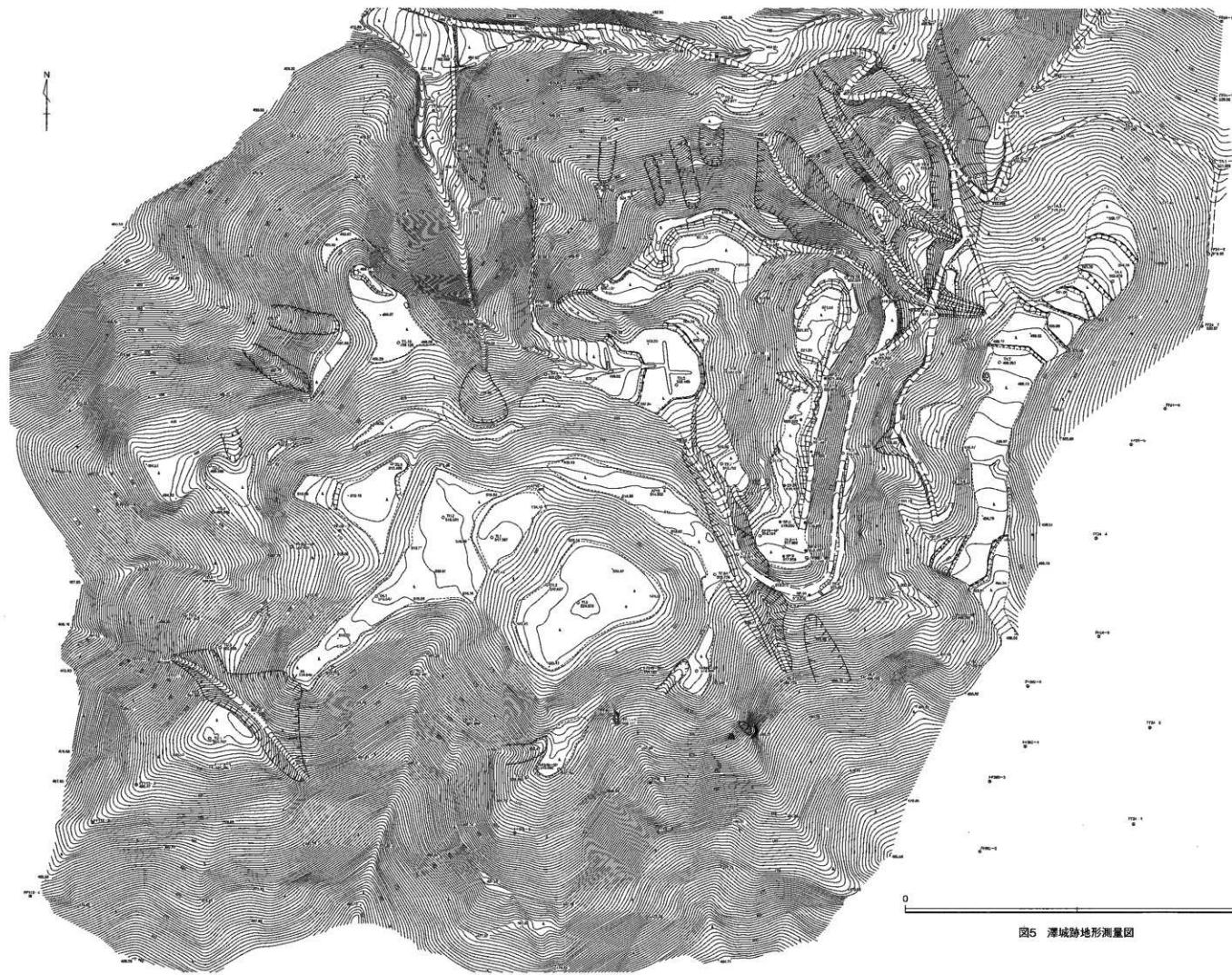


図5 津城跡地形測量図

II 調査の契機と経過

1 調査の契機と経過

澤城跡は、中世の宇陀を代表する澤氏の居城といわれ、以前から、宇陀を代表する中世山城のひとつとして注目されてきた。近年は、澤城跡を含む山林の荒廃が進行しつつあり、澤城の保存と活用が望まれてきた。この城跡の保存と活用をはかる資料の作成等が課題となり、2001年度には城跡の主要部分の地形測量、崩壊箇所の緊急調査（第1次調査）を実施した。

2003年度から遺構・遺物の状況等を明らかにする確認調査を実施することとなり、関係機関・関係者の協議によって諸条件が整った地区的現地調査を実施した。第2次調査は、主郭西側の通称「二の丸」とその下方の平坦面を確認調査対象とし、現地調査を2004年3月～2005年8月まで断続的に実施した。第3次調査は、第2次調査で確認した礎石の状況等を確認するため、その東側に調査区を設定し、現地調査を2007年3月～2007年6月まで断続的に行なった。第4次調査は、副郭内の北側平坦面を確認調査の対象とし、現地調査を2008年3月～2008年11月まで断続的に実施した(図6)。以後、断続的に整理作業を実施した。なお、澤城跡の調査概要は、表2にまとめた。

表2 澤城跡調査一覧表

年度	調査年数	調査地	現地調査期間	調査区域 (都道府県)	調査山伏 (m)	調査概要		報告書名	備考
						種別	面積		
2001 平成13	1次調査	宇都宮市鏡原区大沢・大奥	2001.10.29～2002.3.22	栃木県調査課 (都道府県)	17,760	平原、丘陵、灌 木地帯		「宇都宮市六日町地区調査結果 報告書」(2001年度(宇都 宮市六日町調査範囲)) 2002	地形測量結果
2001 平成13	1次調査	宇都宮市鏡原区大沢 209	2001.11.19～2002.3.19	山形地盤工事 (株)大曾根企 劃(東北)	60	ビット、土丸、土 堤等		「宇都宮市内宮原地区地盤 調査結果」(2001年度(宇都 宮市内宮原地盤調査範 囲)) 2002	
2003 平成15	2次調査	中田市吉野原区大沢 302, 303	2004.3.10～2005.3.31	南三陸地盤調査 (都道府県)	180	灌木地植物、灌 木、ビット	モチカリ、土壌、 土石堆積物、砂 質、泥炭、白雲石 、斜長石、玄武 岩、角閃石、橄 欖石、輝石、黑 雲母、石英、鈣 長石、透閃石、 绿帘石、绿泥石、 方解石、石墨、 有機鉱石、鈣長 石、	「福島町内宮原地区地盤調査 結果報告書」(2004年度(福島 町内宮原地盤調査範 囲)) 2005	
2004 平成16			2005.3.10～2006.3.31	福島地盤調査 (都道府県)					
2005 平成17			2006.3.1～2006.8.10	福島地盤調査 (都道府県)					復元調査
2006 平成18	3次調査	宇都宮市鏡原区大沢 310	2007.3.19～2007.3.30	福島地盤調査 (都道府県)	200	土石堆積物、土壌、 ビット、表	土壌地、夏刈り上 部、谷筋、台地、 斜面、河岸、灌 木地帯、斜坡、 泥炭、	「宇都宮市内宮原地区地盤調査 結果報告書」(2006年度(宇都 宮市内宮原地盤調査範 囲)) 2009	
2007 平成19			2007.5.1～2007.6.21	福島地盤調査 (都道府県)					
2007 平成19	4次調査	宇都宮市鏡原区大沢 309	2008.3.10～2008.3.31	福島地盤調査 (都道府県)	300	土壌、ビット	土壌地、瓦礫、 砂質、泥炭、斜坡、 斜面、河岸、灌 木地帯、斜坡、 泥炭、	「宇都宮市内宮原地区地盤調査 結果報告書」(2007年度(宇都 宮市内宮原地盤調査範 囲)) 2009	
2008 平成20			2008.3.1～2008.6.13 2008.11.20	福島地盤調査 (都道府県)					

図6 滝城跡調査位置図



2 調査組織等

2003年度～2005年度（12月まで）は、榛原町教育委員会が事業主体となって調査を実施したが、2006年1月1日で榛原町、大字陀町、菟田野町、室生村が合併して宇陀市となったため、以降の調査は、宇陀市教育委員会が主体となって実施した。

第2次調査～4次調査の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

2003年度

事業主体 榛原町教育委員会
 総括 教育長 田村義治
 庁務 事務局長 米田 実
 生涯学習課
 課長 石本淳應
 調査 主任 柳澤一宏

2004年度・2005年度（12月31日）

事業主体 榛原町教育委員会
 総括 教育長 田村義治
 庁務 事務局長 小西千恵
 生涯学習課
 次長・生涯学習課長事務取扱
 中村好三

調査 主任 柳澤一宏

2005年度（1月1日～3月31日）・2006年度

事業主体 宇陀市教育委員会
 総括 教育長 岸岡寛式
 庁務 事務局長 中田 進
 社会教育課
 課長 中井富一
 調査 課長補佐 柳澤一宏

2007年度

事業主体 宇陀市教育委員会
 総括 教育長 向出公三
 庁務 教育長 中田 進（～8月）
 事務局長 字瀬幸雄（9月～）
 参事 臨所直幸（10月～）

生涯学習課（社会教育課～4月30日）

課長 中井富一
 調査 課長補佐 柳澤一宏

調査補助員 井上好美、横澤憲、鷹野義明、峯健太郎、竹政俊和、川田晶一、石井良憲、前田渉、松元章徳、境祐希、野田優人、打越真弓、松本千恵、山崎充代、筒井都子、松浪智美、太田保美、日野原洋子、辻本里美、芝井祐子、寺本恵子、横山寿実、宮下令子

調査作業員 横原栄子、大門健夫、大門静、芝田キヨ子、古川マサエ

作業員委託 弥 IDA、㈲ワーカー、安西工業㈱

測量委託 弥ワールド

協力 大員自治会、沢自治会、山口實、山口武、窪田正治、西岡隆、田中一夫、太田利治、柳澤和民、太田恒信、中尾一二、大門栄児、松本 傳、森岡茂彦、松本文男、山本喜清、田中清司、大門平三、横山善彦
 指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立櫻原考古学研究所、金松誠、河内一浩、高田徹、中井均、山川均

2008年度

事業主体 宇陀市教育委員会
 総括 教育長 向出公三
 庁務 事務局長 字瀬幸雄
 参事 臨所直幸（～7月）
 災幹雄（8月～）
 生涯学習課

調査 課長 中出雄三
 課長補佐 柳澤一宏

2009年度

事業主体 宇陀市教育委員会
 総括 教育長 喜多俊幸
 庁務 事務局長 穴田宗宏
 参事 吉村泰和（10月～）
 次長 吉村泰和（～9月）
 人権生涯学習課（～6月30日）

調査 課長 中出雄三
 課長補佐 柳澤一宏

文化財保存課（7月1日～）

調査 課長 尾上清重
 課長補佐 柳澤一宏
 主任 辻本宗久

2010年度

事業主体 宇陀市教育委員会
 総括 教育長 喜多俊幸
 庁務 事務局長 吉村泰和（～12月）
 小室茂夫（1月～）
 参事 小室茂夫（～12月）

文化財保存課

調査 課長 尾上清重
 課長補佐 柳澤一宏
 主任 辻本宗久

III 澤城跡第2次・3次調査

1 調査区と基本層序

主郭西方の一段低くなっている平坦面と更に西下方にある平坦面を第2次調査の対象地とし、前者の平坦面に第1トレンチ、後者の平坦面に第2トレンチ・第3トレンチを設定した。後述の第1トレンチにおいて礫石建物の一部を検出したことから、その東側の状況を確認する調査区を設定し、第3次調査とした。

第2次調査第1トレンチおよび隣接する第3トレンチの基本層序は、黒褐色の腐葉土下は暗褐色土の第1層、暗褐色土の第2層、暗褐色粘質土等の第3層、褐色粘質土等の第4層、褐色砂質土等（整地土）の第5層となっている。上層造構面（第1造構面）は、第3層・第4層間、下層造構面（第2造構面）は、第4層・5層間で確認している。なお、地表から上層造構面までは約30cm、下層造構面までは約40cmとなっている（図7・9・10）。

第2次調査第2トレンチ・第3トレンチの基本層序は、黒褐色の腐葉土下は暗褐色砂質土（第1層）、明褐色砂質土（第2層）、褐色砂質土等（第3層・整地土）となっている。造構面は、第3層（整地土）上面で確認しており、地表から造構面までは約25～35cmとなっている（図8）。平坦面を形成する整地は、その土層断面観察から東から西方へと比較的大規模に行われており、第2トレンチ東端の一部で地山、下方の西端で岩盤の一部を確認できるにすぎず、この他は厚い整地土によっている（図8・9）。

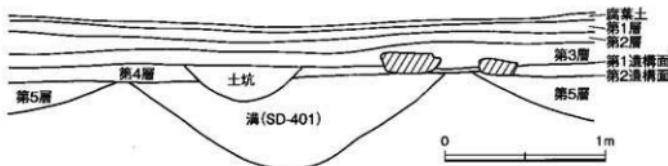


図7 澤城跡（第2次調査第1トレンチ・3次調査）基本層序模式図

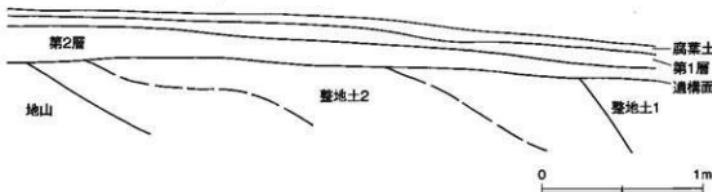
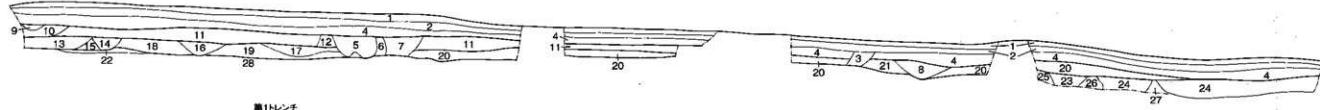


図8 澤城跡（第2次調査第2トレンチ）基本層序模式図

第1レンチ
L=517m



第1レンチ
L=517m

—D

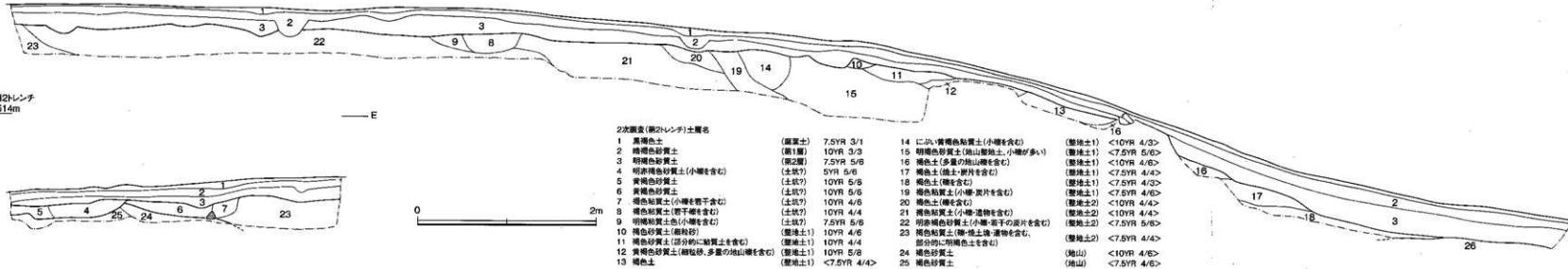


—D

2次露頭(第1レンチ)土層名

1 黒褐色土	(底質土) <7SYR 2/2>	(第4層) <10YR 4/0>
2 黒褐色土	(底質土) <7SYR 2/2>	<10YR 4/4>
3 黑褐色粘土	(底質土) <10YR 3/4>	<10YR 3/0>
4 黑褐色土	(第2層) <10YR 3/4>	<7SYR 4/4>
5 黑褐色粘土(底面に地中海土片を含む)	(土被り) <7SYR 2/3>	<7SYR 3/4>
6 黑褐色粘土(底面に地中海土片を含む)	(土被り) <7SYR 2/3>	<7SYR 3/4>
7 黑褐色土(底面に地中海土片を含む)	(第3層) <7SYR 4/0>	<10YR 3/0>
8 黑褐色粘土(底質、少量の地中海土片を含む)	(底質) <10YR 3/4>	<10YR 3/3>
9 黑褐色土	(第3層) <7SYR 4/4>	<7SYR 3/4>
10 黑褐色土	(第3層) <7SYR 4/4>	<7SYR 1/4>
11 黑褐色粘土(大塊・塊状の地中海土片を含む)	(第3層) <7SYR 4/4>	<10YR 4/0>
12 黑褐色粘土(大塊・塊状土片を含む)	(第3層) <7SYR 4/4>	<10YR 4/0>
13 黑褐色粘土(底質、大塊・塊状土片・炭を含む)	(第4層) <10YR 4/4>	<10YR 4/6>
14 黑褐色土	(第4層) <10YR 4/4>	<7SYR 4/6>
15 黑褐色粘土(大塊を含む)	(第4層) <10YR 4/4>	<10YR 4/0>
16 黑褐色粘土(底面に地中海土片を含む)	(底質) <10YR 4/4>	<10YR 3/0>
17 黑褐色土(底面が地中海土片・炭を含む)	(底質) <10YR 4/4>	<10YR 3/0>
18 黑褐色土(底質、小塊・地中海土片を含む)	(第4層) <7SYR 4/4>	<7SYR 3/4>
19 黑褐色土(底質、小塊・地中海土片を含む)	(第4層) <7SYR 4/4>	<7SYR 3/4>
20 黑褐色粘土(底面に地中海土片を含む)	(底質) <10YR 3/0>	<10YR 3/0>
21 黑褐色土	(第4層) <7SYR 4/4>	<7SYR 3/4>
22 黑褐色粘土(底面・地中海土・炭を含む)	(底質) <10YR 3/3>	<10YR 3/3>
23 黑褐色砂質土(部分的に結晶土・炭の塊を含む)	(第5層) <7SYR 3/4>	<7SYR 3/4>
24 黑褐色土(塊を含む)	(第5層) <7SYR 4/4>	<7SYR 4/4>
25 黑褐色粘土(底面に地中海土・炭を含む)	(底質) <10YR 4/4>	<10YR 4/0>
26 黑褐色粘土(炭を含む)	(第5層) <7SYR 4/4>	<7SYR 4/4>
27 黑褐色粘土(大塊を含む)	(第5層) <10YR 4/0>	<10YR 4/0>
28 黑褐色粘土(地中海地土)	(第5層) <7SYR 4/6>	<7SYR 4/6>

第2レンチ
L=514m



第2レンチ
L=514m

—E

2次露頭(第2レンチ)土層名

1 黑褐色土	(底質土) 7SYR 3/4	14 二つ、複数個の層土(小塊を含む)	(底質土) <10YR 4/0>
2 黑褐色砂質土	(底質土) 10YR 4/6	15 黑褐色粘土質土(山側地土・小塊が多い)	(底質土) <10YR 5/0>
3 明るい黒褐色土	(第2層) 7SYR 5/6	16 黑褐色土(多量の地山地土を含む)	(底質土) <10YR 4/6>
4 明るい黒褐色粘土(小塊を含む)	(土被り) 5YR 5/6	17 黑褐色土(底土・地中海土片を含む)	(底質土) <7SYR 4/4>
5 黑褐色砂質土	(土被り) 10YR 5/6	18 黑褐色土(底土)	(底質土) <7SYR 4/4>
6 黑褐色土	(土被り) 10YR 5/6	19 黑褐色粘土(地中海土片を含む)	(底質土) <10YR 4/4>
7 黑褐色粘土(小塊を含む)	(土被り) 10YR 4/6	20 黑褐色土(底土)	(底質土) <10YR 4/4>
8 黑褐色粘土(小塊を含む)	(土被り) 10YR 4/4	21 黑褐色粘土(小塊・植物を含む)	(底質土) <10YR 4/4>
9 明るい黒褐色土(小塊を含む)	(土被り) 7SYR 5/6	22 明るい黒褐色粘土(小塊・若干の地中海土片を含む)	(底質土) <7SYR 5/0>
10 黑褐色粘土(小塊を含む)	(土被り) 10YR 4/4	23 黑褐色土(底土・块状・漂礫を含む)	(底質土) <7SYR 4/4>
11 黑褐色土(3分の二粘土土・砂・多量の地山地土を含む)	(底質土) 10YR 4/4	24 黑褐色土	(地山) <10YR 4/6>
12 黑褐色砂質土(砂・砂・多量の地山地土を含む)	(底質土) 10YR 5/6	25 黑褐色土	(地山) <7SYR 4/6>
13 黑褐色土	(底質土) <7SYR 4/4>	26 砂岩	(地山) <7SYR 4/6>

図9 深城跡(2次調査)土層断面図

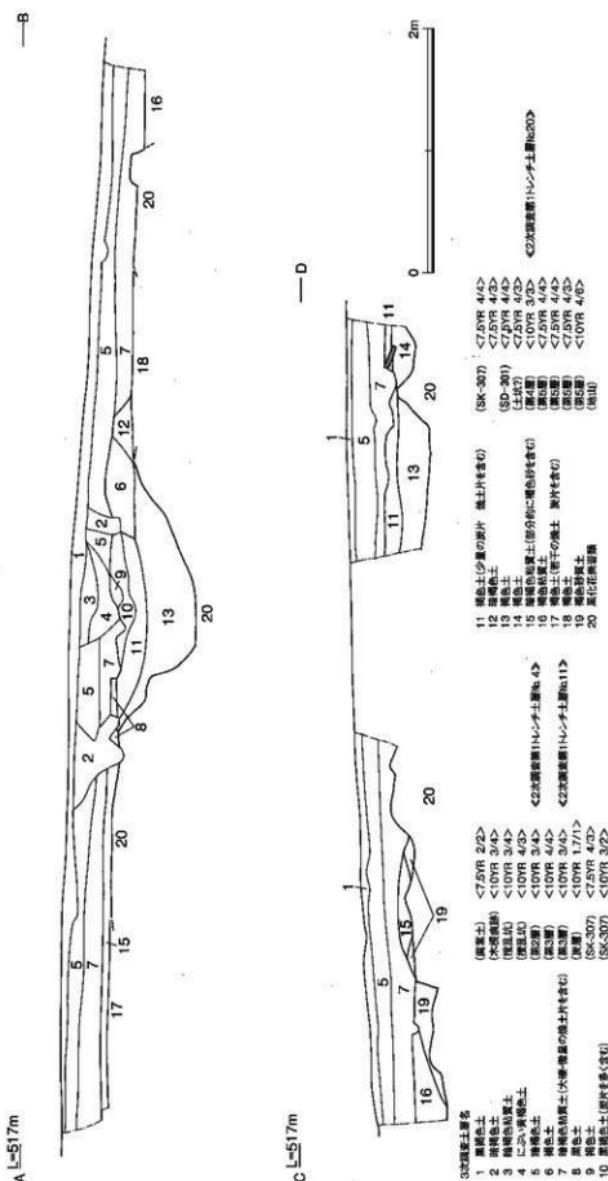


図10 潜城跡（第3次隕谷）土層断面図

2 検出遺構

(1) 第2次調査第1トレンチ・第3トレンチ

上層遺構（図11～13、図版2・3・6）

礎石建物跡（SB-201）

主郭西方の平坦面北西角に設定したところ、第2次調査で礎石7石とその抜き取り穴と思われる土坑、第3次調査で礎石3石、土坑7基を確認している。礎石は一辺（長さ）約50cm程度の方形または不整形の自然石を用いている。東西方向の礎石は、平坦面北辺に沿って直線的に並ぶ。これらの礎石は、褐色砂質土（第5層・整地土）上に据えられ、その礎石の下半を暗褐色粘質土等（第4層）で埋めている。

現状での礎石建物は、南北約2.9m、東西約10.8mの規模を有するが、調査範囲が限られているため、具体的な礎石建物の配置は明らかにできない。遺構面は南側へと緩やかに傾斜し、礎石及びその抜き取り痕は認められない。東西方向の礎石列は、東方へ伸びる可能性も考えられるが、現段階では、明らかにできない。

土坑（SK-301～307）

第3次調査において、7基の土坑を確認している。SK-302は、焼けた石材（礎石）を埋め込んでいる。これら土坑の規模等は表3にまとめた。

下層遺構（図10・13）

溝（SD-301）

調査区壁に沿って若干の掘り下げを行い、下層遺構等の状況を行ったところ、幅2.1m、深さ0.3～0.8mの溝（SD-301）を検出した。土師器等が出土している。溝は東西方向にのびていると思われるが、第2次調査時は、整地土と混同してしまい、明確な遺構を確認していない。

第1遺構面を保護するために、下層の掘り下げは最小限とし、現段階では土層観察にとどめているところが多いが、第1遺構面を構成する整地土下にはさらに遺構面の存在が推定できる。

(2) 第2次調査第2トレンチ・第3トレンチ

第2層除去後、遺構面を検出し、平坦面南東隅において礎石2石、土坑1基（SK-201）、ピット11基（Pit 201～211）等を確認している。調査範囲が限られているため、具体的な礎石建物の配置は明らかにできない（図12・14、図版4・5）。これら遺構の規模等は表4にまとめた。

なお、ピットのうち、一部においては、掘立柱建物となる可能性があるものも認められ、検出している限りにおいては、1間×1間（2m×2m）の規模をはかる。また、周辺に礎石建物の存在も想定できるが（SB-202）、詳細は明らかにできない。

第1遺構面を構成する整地土は深く、整地土下の下層遺構面までには至っていない（図9）。

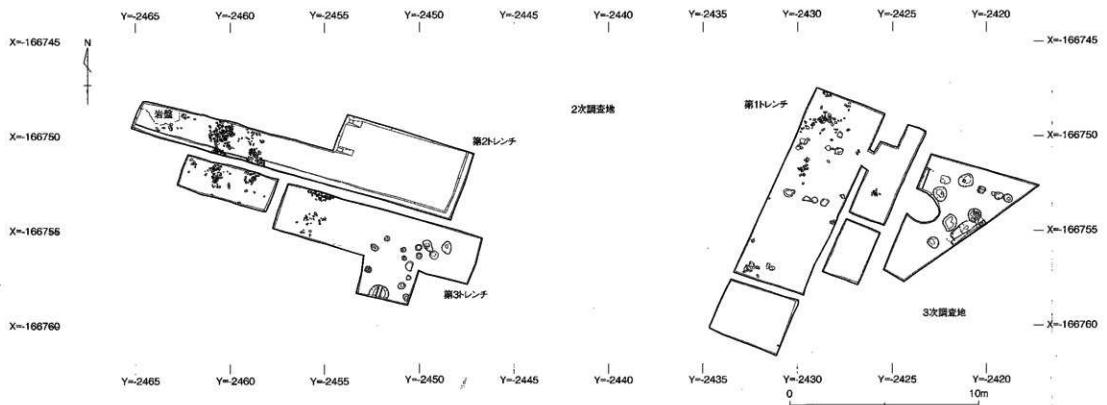
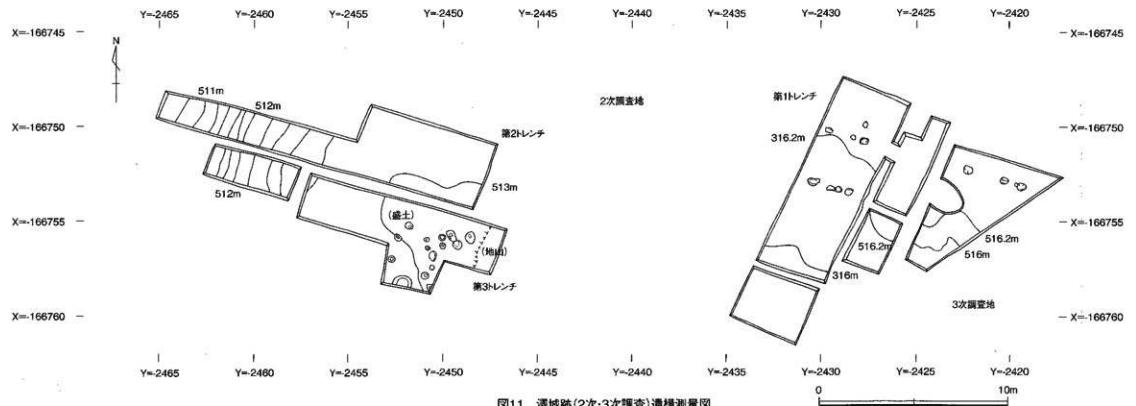


図12 津城跡(2次・3次調査)遺構平面図

表3 深城跡(第2次調査第1トレンチ・第3次調査)検出遺構一覧表

遺構名	田舎番号	形態	緯度 (m)	東風 (m)	出土物	備考
SB-201	SB-01	円形	東風 10m (SB-01)	北風 17m (SB-01)	褐色土 土壌層(底) 鐵石塊	
SK-301	SK-01	円形	北風 73m、南風 11m	北風 11m	褐色土 土壌層(底)	
SK-302	SK-02	円形	南風 66m、北風 24m	南風 24m	褐色土 土壌層(底)	
SK-303	SK-03	円形	南風 70m、北風 16m	北風 16m	褐色土 土壌層(底)	
SK-304	SK-04	圓形	北風 74m、南風 10m	南風 10m	褐色土 土壌層(底)	
SK-305	SK-05	円形	南風 40m、北風 12m	北風 12m	褐色土 土壌層(底)	
SK-306	SK-06	円形	北風 54m、南風 15m	南風 15m	褐色土 土壌層(底)	
SK-307	SK-07	円形	南風 55m、北風 44m	北風 44m	褐色土 土壌層(底)	
SD-301	SD-01	長方形	北風 60m (SD-01) 南風 23m、北風 10m	北風 10m (SD-01)	褐色土 瓦質土層 (SD-01)、鐵石 土壌層(底) 鐵石塊	

2次調査第1トレンチ

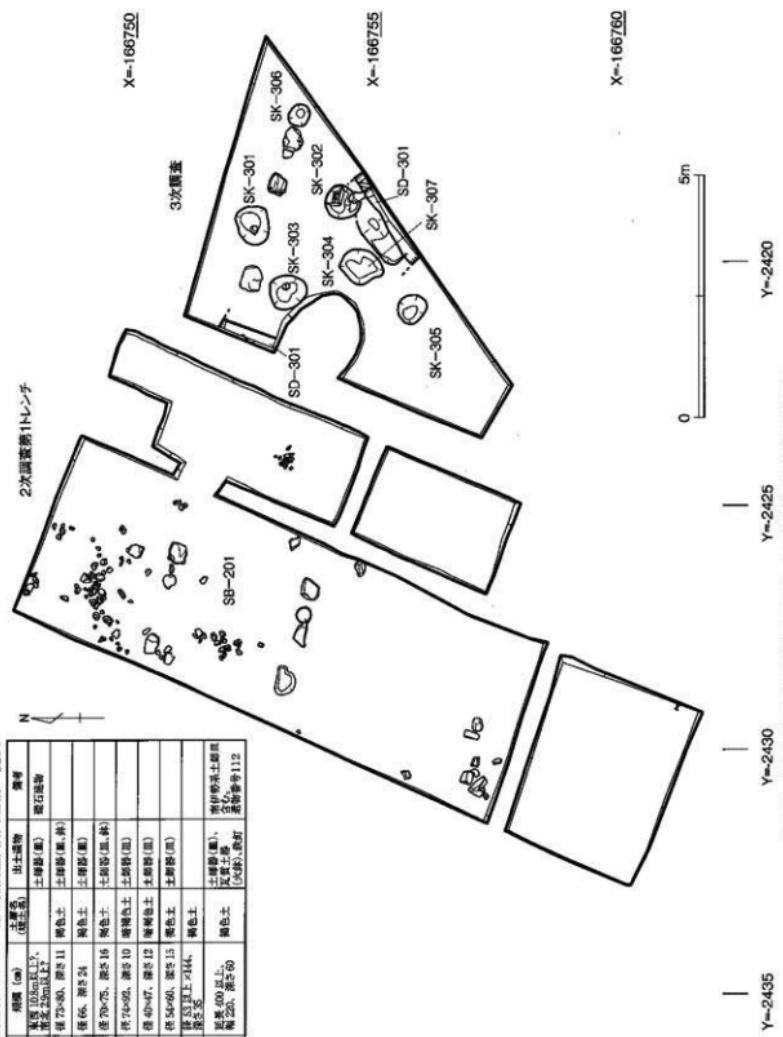


図13 深城跡(第2次調査第1トレンチ・第3次調査)遺構平面図

Y=2450

Y=2455

Y=2460

Y=2465

X=1887.50 —————

N

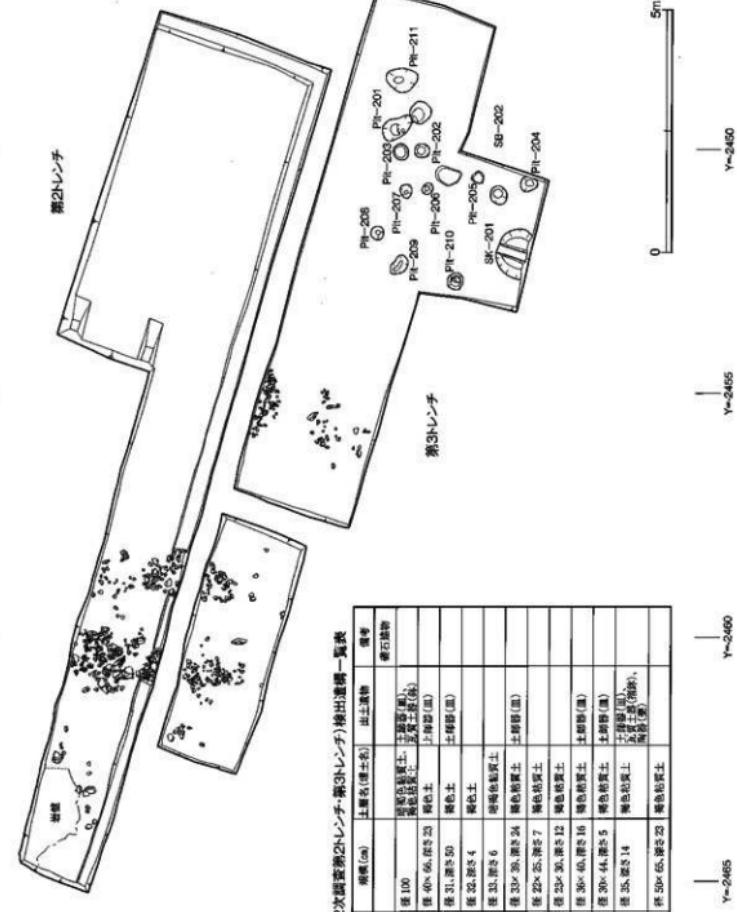


図 14 湯城跡（第2次調査第2トレンチ・第3トレンチ）遺構平面図

表4 湯城跡（第2次調査第2トレンチ・第3トレンチ）検出遺構一覧表

遺構名	位置標名	形態	幅幅(m)	土壤名(土色名)	出土物	備考
SB-202	PH-01	円形	径 100	褐色粘土 褐色粘土(土) 褐色粘土(土)		赤土鉢
SK-201	PH-01	椭円形	径 40×60, 高さ 23	褐色土 褐色粘土(土)		
PH-201	PH-02	円形	径 31, 高さ 50	褐色土 土堆積(土)		
PH-202	PH-03	円形	径 32, 高さ 4	褐色土 褐色粘土(土)		
PH-204	PH-04	円形	径 33, 高さ 6	褐色粘土(土)		
PH-205	PH-05	円形	径 21, 高さ 24	褐色粘土 褐色粘土(土)		
PH-206	PH-06	円形	径 22×25, 高さ 7	褐色粘土		
PH-207	PH-07	円形	径 25×30, 高さ 12	褐色粘土		
PH-208	PH-08	円形	径 36×40, 高さ 16	褐色粘土 土堆積(土)		
PH-209	PH-09	椭円形	径 30×44, 高さ 5	褐色粘土 土堆積(土)		
PH-210	PH-10	円形	径 35, 高さ 14	褐色粘土 褐色粘土(土)		
PH-211	PH-11	椭円形	径 35×65, 高さ 23	褐色粘土		

X=1887.50 —————

Y=2450

Y=2455

Y=2460

Y=2465

3 出土遺物

各層からサスカイト、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、犬形土製品、瓦、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、銅製金具、錢貨、ガラス、ガラス洋、砥石、有溝砥石、軽石、壁土等が出土している。細片が多いものの、これらは16世紀第3四半期の範疇で捉えることができるものと思われる。

(1) 土器 (図15～17、表5・6、図版8・9)

1～12 (図15) が第2次調査第1トレンチ出土、13～18 (図16) が第2次調査第2・3トレンチ出土、19～31 (図17) が第3次調査出土のものである。

1・2・8・14・15・16は、美濃焼の天目茶碗である。1は現存高4.2cm、復元口径11.4cm、2は高台径3.2cmである。高台周辺を除き、鋸歯が施される。体部はやや丸みをもって開き、口縁部は一旦立ち上がり、口縁端部が短く外反する。高台は削り出しによっている。8は現存高4.4cm、復元口径11.4cmである。鋸歯が施され、体部は直線的に開き、口縁部は一旦立ち上がり、口縁端部が短く外反する。

14は現存高4.45cm、復元口径11.4cm、15は高台径4.2cm、16は高台径4.4cmである。体部はやや丸みをもって開き、口縁部は一旦立ち上がり、口縁端部が短く外反する。高台は削り出しによっている。高台周辺を除き、鋸歯が施される。

3は美濃焼の皿である。器高2.7cm、復元口径10.6cm、高台径5.0cmである。削り込み高台で、体部は

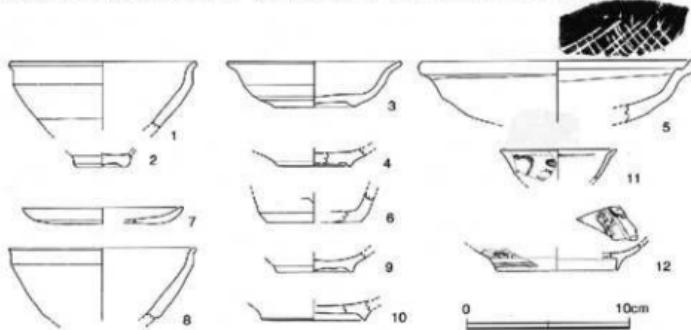


図15 淀城跡（第2次調査）出土土器実測図（1）

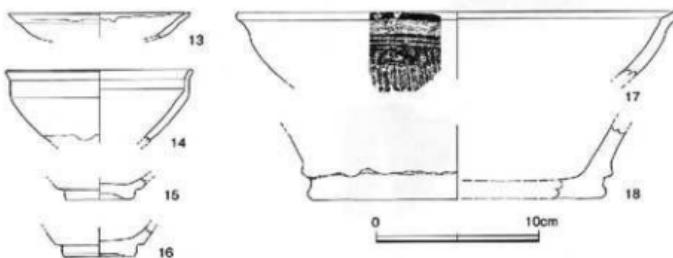


図16 淀城跡（第2次調査）出土土器実測図（2）

やや内縁気味に開き、口縁部が外反する。全面に鉄輪が施される。

4・9・10は灰釉陶器の皿である。4は復元高台径4.6cm、9は復元高台径4.7cm、10は復元高台径6.4cmである。

5は美濃焼のおろし皿で現存高3.8cm、復元口径16.8cmである。口縁部は外反し、口縁端部は肥厚し丸く取める。内面には格子状のおろし目を刻む。6は美濃焼の壺で平底の底部径は、5.8cmに復元できる。

7の土師器皿は、器高1.0cm、復元口径9.8cmと比較的浅い。

11は、景德鎮窯系青花の杯、12は景德鎮窯系青花の皿である。11は現存高1.9cm、復元口径7.2cmである。口縁部は外反し、口縁端部を尖り気味に取める。12は現存高1.6cm、復元高台径7.4cmである。

13は土師器灯明皿で、口縁端部に煤が付着する。

17は土師器鉢で、現存高4.1cm、復元口径27.0cmである。体部は内縁気味に開き、口縁部を外反させ、口縁端部を丸く取める。

18は備前焼鉢で、平底の底部径を17.8cmに復元できる。

19-21～27は土師器皿である。26はSK-302出土、27は灯明皿で、第4層（整地土）出土のものである。20は瓦質土器擂鉢で底部径を13.6cmに復元できる。

28は復元口径27.4cmの土師器土釜、29は復元口径29cmの土師器鍋、30・31は瓦質土器擂鉢で、ともに第4層（整地土）からの出土である。29は南伊勢系の鍋で、体部外面にハケ目を施す。

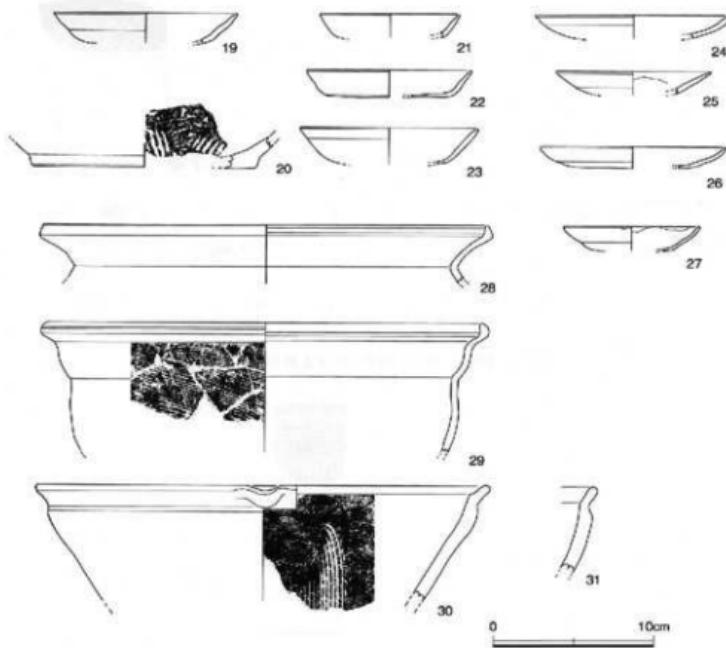


図17 潤城跡（第3次調査）出土土器実測図

(2) 鉄製品 (図 18 ~ 23、表 7 ~ 9、図版 9)

32 ~ 42 (図 18)、46 ~ 101 (図 20 ~ 21) が第 2 次調査第 1 トレンチ出土、102 ~ 109 (図 22) が第 2 次調査第 2 トレンチ出土、43 ~ 45 (図 19) が第 2 次調査第 3 トレンチ出土、110 ~ 112 (図 23) が第 3 次調査の鉄製品である。第 2・3 次調査において 185 点の鉄釘が出土しているが、本書には鉄釘頭部の形態が明確なもの 67 点 (46 ~ 112) に限って登載している。

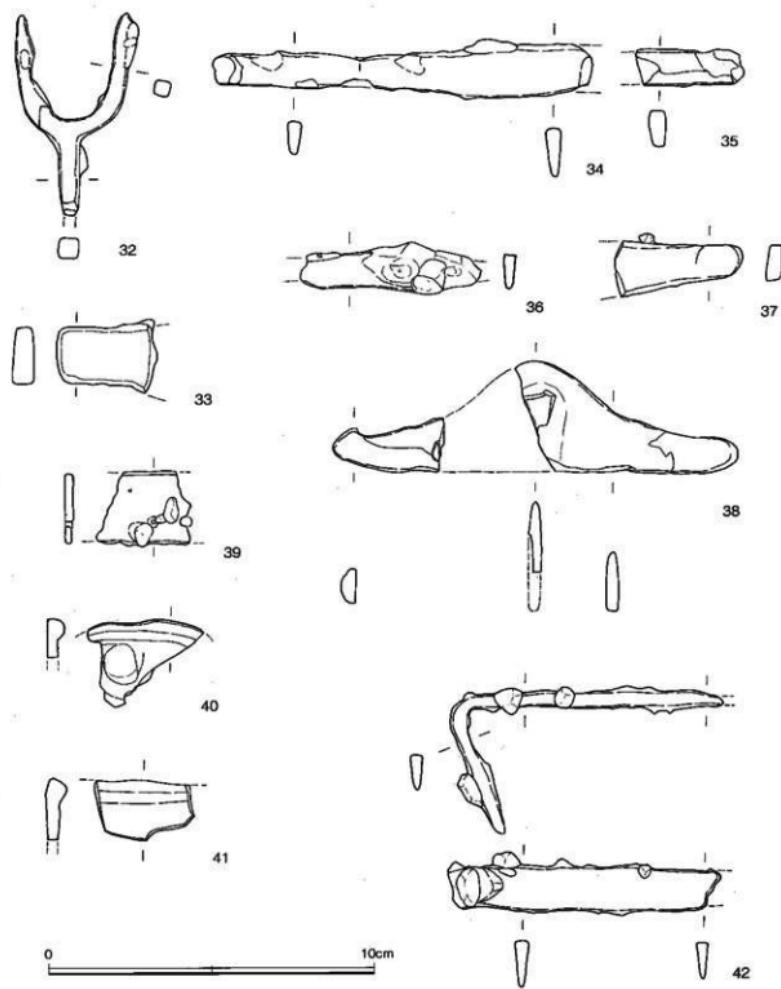


図 18 潤城跡（第 2 次調査）出土鉄製品実測図（1）

32・44は雁股形の鉄釘である。32は現存長6.2cm、鎌身部最大幅3.75cmを測る。45は短頸の尖根形鉄釘で、現存長7.45cm、鎌身部最大幅2.45cmを測る。

33は鉄刀の茎尻と考えられる。

34～37・42は鉄刀子で、35・37は茎部の破片である。42は刀身部をL字状に曲げられ、茎部を欠損する。

38の火打金は、発掘調査時に破損してしまい、その全容が明らかでないが、山形の平面形態、全長12.5cm、最大幅3.3cmに復元できる。

39～41・43の詳細は不明であるが、39は小札の可能性も考えられる。

鉄釘は、破片がほとんどであるため詳細な分類は困難であるが、全長約3cm(59, 63)の小形品、全長約5cm～6cmの中形品、全長約12cm～14cm(94～110)の大形品に大別できる。その大半を占めるのが全長約5cm～6cmの中形品である。また、頭部の形態は折り返しによるものが大半を占め、L字形を呈するものは3点(99～101)に過ぎない。各鉄釘の詳細は表8・9にまとめている。

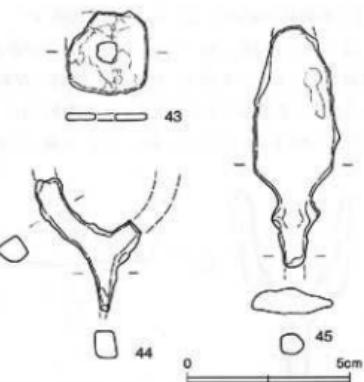


図19 潤城跡(第2次調査)出土鉄製品実測図(2)



写真4 潤城跡第2次調査第3トレンチ遺構検出状況



写真5 潤城跡第2次調査第3トレンチ埋め戻し状況



写真6 潤城跡第3次調査地埋め戻し状況(1)



写真7 潤城跡第3次調査地埋め戻し状況(2)

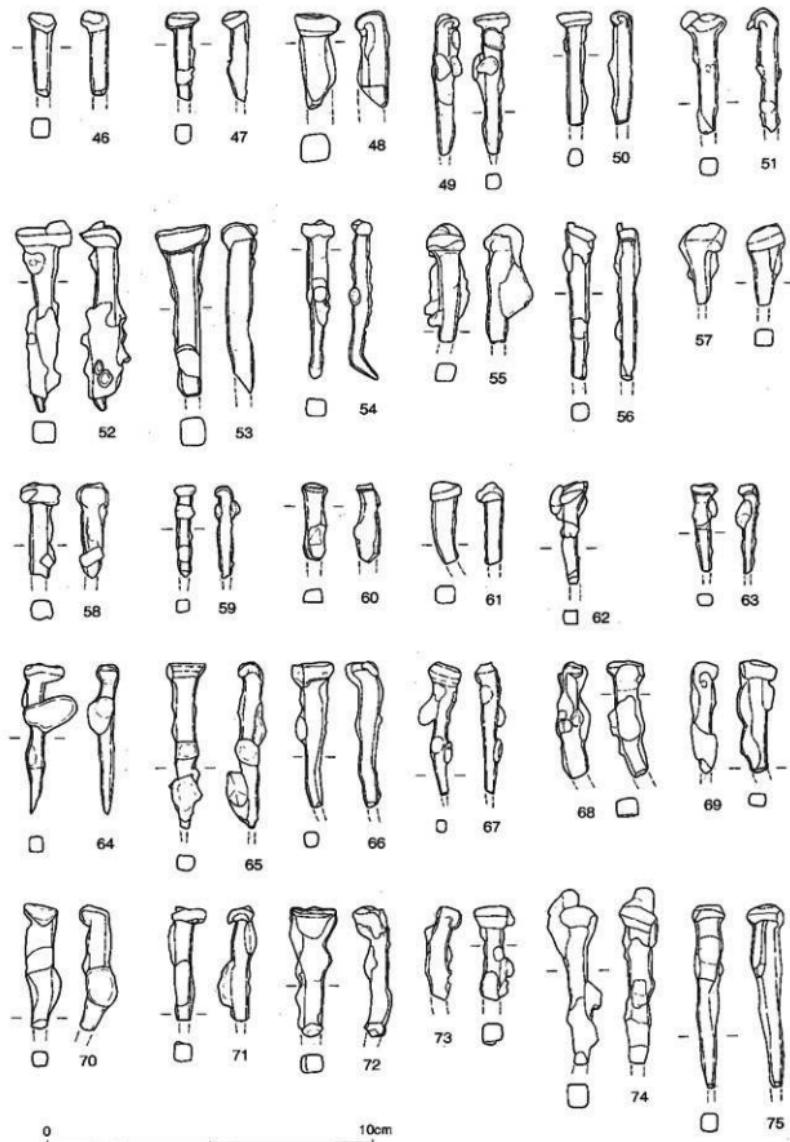


図20 潛城跡（第2次調査）出土鉄製品実測図（3）

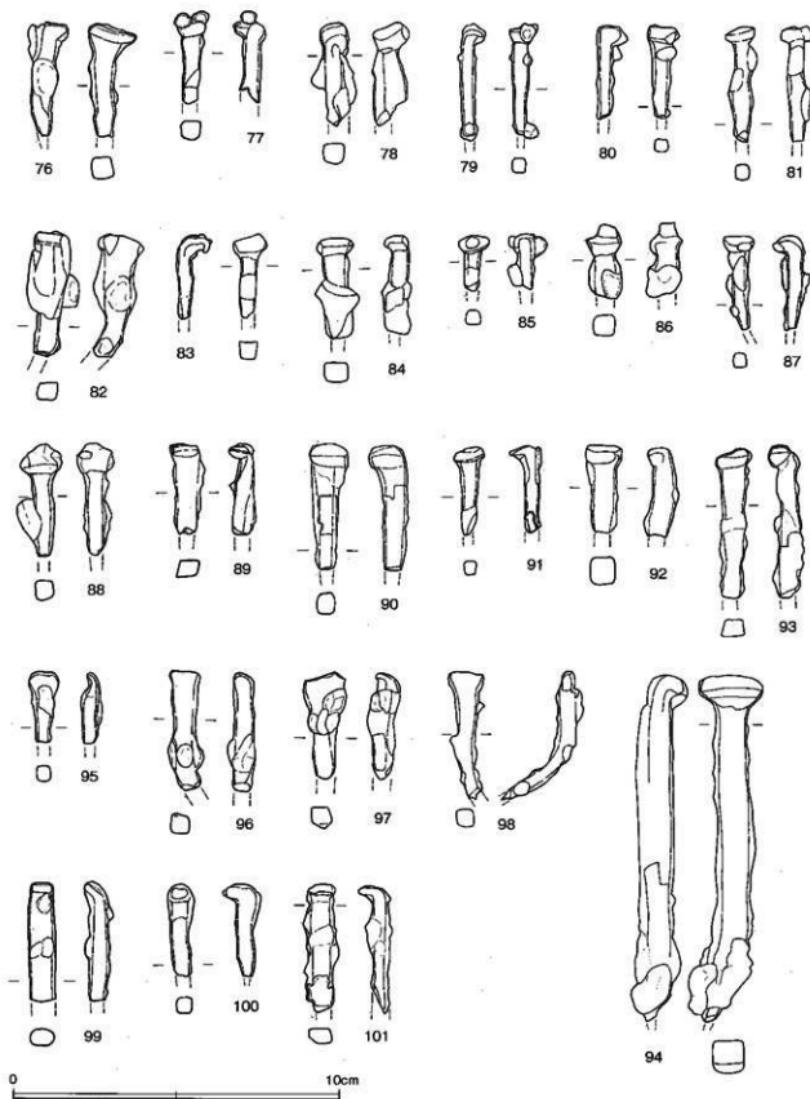


図21 津城跡（第2次調査）出土鉄製品実測図（4）

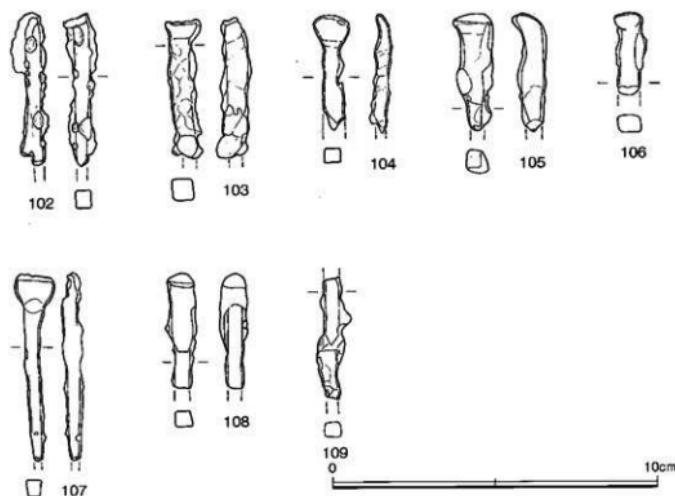


図22 潤城跡（第2次調査）出土鉄製品実測図（5）

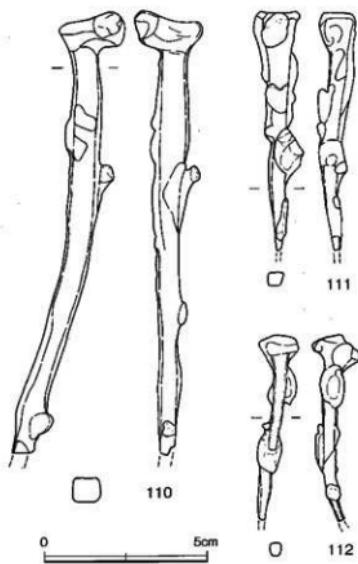


図23 潤城跡（第3次調査）出土鉄製品実測図

(3) 銅製品 (図 24、表 10、図版 9・10)

- 113 は、直径 2.1cm、断面径 0.3cm の銅環である。
 114 は、果実または花をあしらったように思える全長 3.8cm、最大幅 1.1cm の飾り金具である。
 115 は金具の一部と推定されるが詳細は不明である。
 116 は現存長 4.0cm、最大幅 1.5cm、厚さ 0.1cm の金具である。火縄銃の一枚火蓋の可能性が考えられる。
 117 は発掘調査時にその一部を欠損したが、本来は全長 17.8cm 以上、幅 0.5cm、断面形態が U 字状を呈する細長いものである。詳細は明らかにできないが、縁金具の可能性が考えられる。

(4) 鉛製品 (図 24、表 10、図版 10)

- 118 は全体に鋳化した鉛玉 (火縄銃の弾) で、直径 1.3cm の球形を呈する。

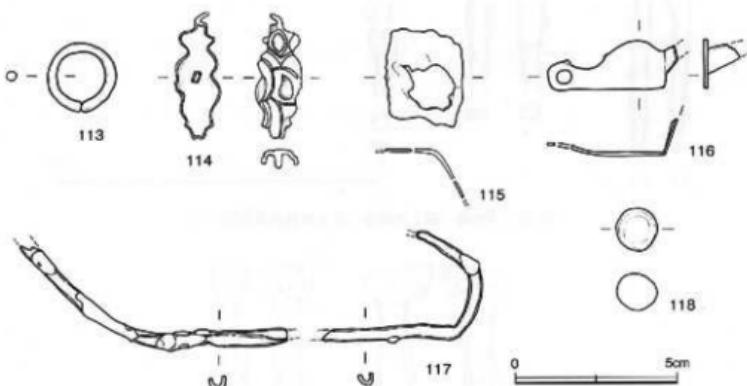


図 24 潤城跡 (第2次調査) 出土銅製品・鉛製品実測図

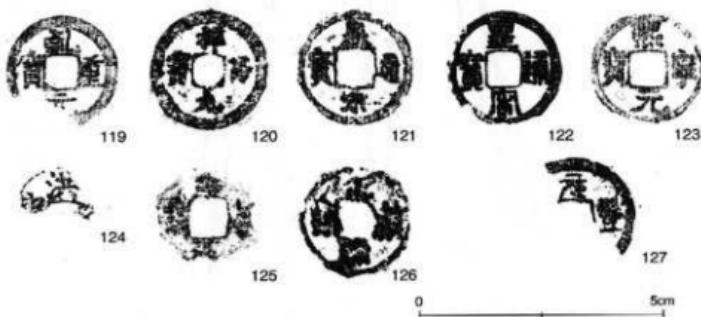


図 25 潤城跡 (第2次・3次調査) 出土銭貨拓影

(5) 銭貨 (図 25、表 11、図版 10)

119 が乾元重寶、120 が祥符元寶、121・122 が皇宋通寶、123 が熙寧元寶、124 が洪武通寶、127 が元豐通寶である。125・126 の詳細は明らかにできない。

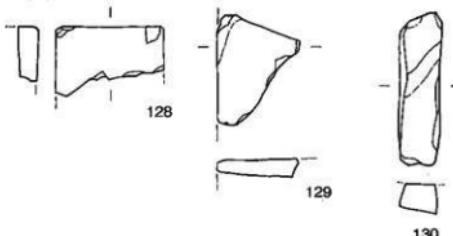
(6) 石製品 (図 26、表 12、図版 10)

128～130 は、石製砥石の破片である。細片であるため、その全容は明らかにできない。

131 は現存長 6.7cm、幅 5.5cm、厚さ 2.4cm の軽石である。

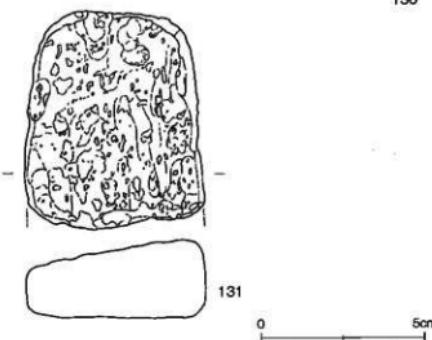
(7) 土製品 (図 27、図版 10)

132 は、犬形土製品である。頭部左側と 4 本の足は欠損し、全体に摩滅が著しい。尻尾は短く尻部に貼り付ける。



(8) 有溝砥石 (図 28、表 13、図版 11)

133～138 は陶器片を転用した砥石 (陶片転用砥石)、139 は石製の砥石 (筋砥石) である。これらの砥石には幅 10mm 程度の凹溝があり、その溝内には溝と同じ方向に研いだ痕跡が認められる。133・137～139 には両面 (内外面・A B 面) にわたって凹溝が認められる。鉛玉 (鉄砲弾) 用の砥石とも推定されているところである。



(9) その他の遺物 (図版 12)

140・141 は、平瓦片である。140 は第 2 次調査第 1 トレンチ第 1 層出土、141 は同第 3 層出土である。

142・143 は、熔解した銅などが付着した土師器皿である。いずれも第 2 次調査第 1 トレンチ出土である。

144 は、ガラス滓である。第 2 次調査第 1 トレンチ第 3 層出土である。145 は、ガラス片である。第 2 次調査第 1 トレンチ第 3 層出土である。本資料については、改めて詳細な調査が必要と考える。

図 26 深城跡 (第 2 次調査) 出土石製品実測図

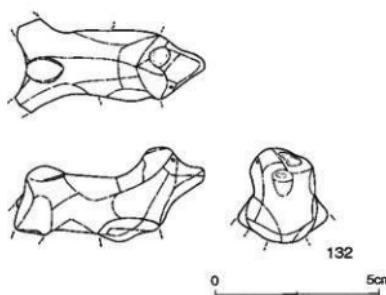


図 27 深城跡 (第 2 次調査) 出土犬形土製品実測図

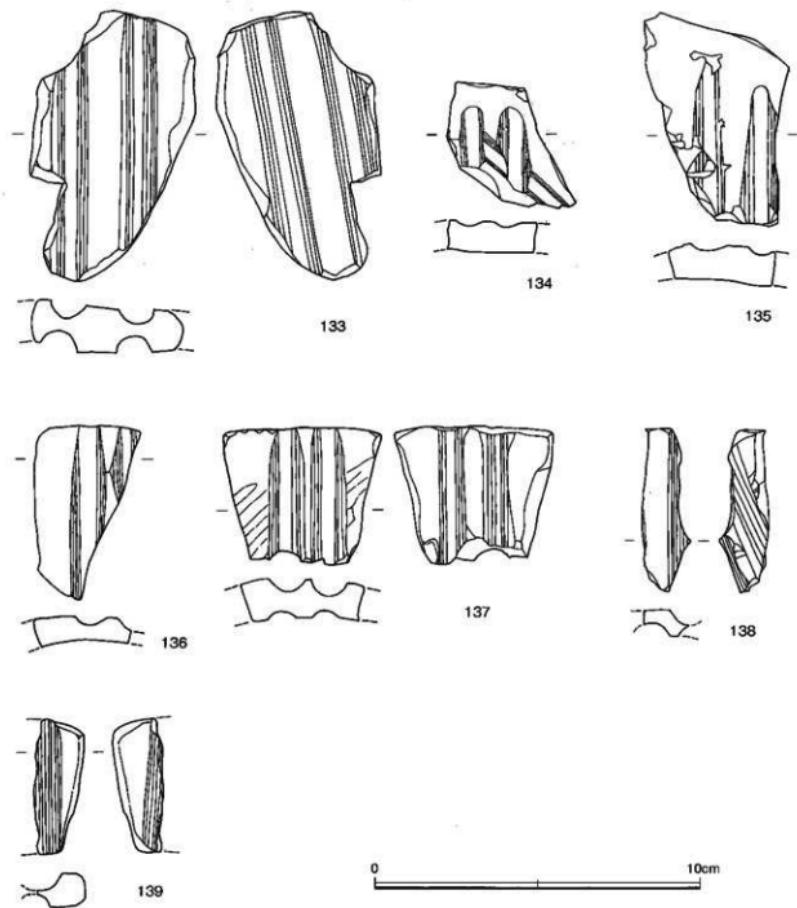


図 28 潭城跡（第2次調査）出土有溝砥石実測図

表5 澤城跡（第2次調査）出土土器観察表

辨認番号	器種	法量(cm)	色調・土色・焼成	出土位置	備考
1	陶器 大口茶碗	復元口径 11.4 現存高 4.2	色調 内面 黒褐色(7.5YR 2/1) 外面 黑褐色(7.5YR 2/1) 体部 にぶい褐色(5YR 6/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第1層	美濃燒
2	陶器 大口茶碗	高台径 3.2 現存高 1.3	色調 内面 赤黒色(2.5YR 2/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR 5/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 背上 採集	美濃燒
3	陶器 皿	復元口径 10.6 復元高台径 5.0 現存高 2.7	色調 内面 黒褐色(7.5YR 3/1),暗赤褐色(2.5YR 3/3) 外面 にぶい赤褐色(2.5YR 4/4) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第2層	美濃燒
4	灰釉陶器 皿	復元高台径 4.6 現存高 1.1	色調 内面 オリーブ色(10YR 6/2) 外面 淡黄色(2.5YR 8/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第1層	
5	陶器 おろし皿	復元口径 16.8 現存高 3.8	色調 内面 淡青色(2.5Y 8/3) 外面 淡黄色(2.5Y 8/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第1層	
6	陶器 甕	底径 器高 5.8 1.9	色調 内面 赤黒色(10YR 1.7/1) にぶい黃褐色(10YR 6/4) 胎土 合 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 高臺土-第1層	美濃燒
7	土師器 皿	復元口径 9.8 器高 1.0	色調 内面 橙色(7.5YR 7/6) 外面 淡黄色(2.5Y 8/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層(下層)～ 第4層(整地上)	
8	陶器 天目茶碗	復元口径 11.4 現存高 4.4	色調 内面 暗褐色(7.5YR 3/4) 外面 暗褐色(7.5YR 2/1) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層	美濃燒
9	灰釉陶器 皿	高台径 4.7 現存高 1.2	色調 内面 淡黄色(5Y 8/4) 外面 淡黄色(2.5Y 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層	
10	灰釉陶器 皿	復元高台径 6.4 現存高 1.2	色調 内面 明オーブ灰色(2.5GY 7/1) 外面 明オーブ灰色(2.5GY 7/1) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層	
11	景德鎮系青花 杯	復元口径 7.2 現存高 1.9	色調 内面 明緑灰色(7.5G 8/1) 外面 明緑灰色(7.5G 8/1) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層	
12	景德鎮系青花 皿	復元高台径 7.4 現存高 1.6	色調 内面 明緑灰色(5GY 8/1) 外面 明緑灰色(5GY 8/1) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第1トレンチ 第3層	
13	土師器 皿	復元口径 11.2 現存高 1.5	色調 内面 にぶい黃色(10YR 6/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第2トレンチ 第1～2層	
14	陶器 大口茶碗	復元口径 11.4 現存高 4.45	色調 内面 黒褐色(7.5YR 2/1) 胎部 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 外面 黒褐色(10YR 2/1) 端部 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第2トレンチ 第2層	美濃燒
15	陶器 天目茶碗	高台径 4.2 現存高 1.3	色調 内面 黒褐色(7.5YR 2/2) 外面 にぶい褐色(7.5YR 6/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第2トレンチ 第2層	美濃燒
16	陶器 天目茶碗	高台径 4.4 現存高 1.8	色調 内面 明褐色(10YR 3/5) 外面 にぶい赤褐色(5YR 5/3) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第2トレンチ 第1～2層	美濃燒
17	土師器 鉢	復元口径 27.0 現存高 4.1	色調 内面 にぶい黄褐色(10YR 7/3) 外面 にぶい黄褐色(10YR 7/4) 胎土 精良 焼成 良好	2次調査 第2トレンチ 第2層	
18	陶器 鉢	残存高 4.5 復元底部深17.8	色調 内面 赤褐色(10R 6/6) 外面 赤褐色(10R 6/6) 胎土 合 焼成 良好	2次調査 第3トレンチ 第2層	信濃燒

表6 潤城跡（第3次調査）出土土器類表

持番号	種類	法量(cm)	色調・地土・焼成	出土位置	備考
19	土器器皿	復元口径 11.2 現存高 1.85	色調 内面 淡黃色(25Y 8/3) 外面 淡白色(25Y 8/2) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第2層	
20	瓦質土器 擂鉢	復元底径 13.6 現存高 1.95	色調 内面 に近い黄褐色(10YR 6/4) 外面 に近い黄褐色(10YR 6/4) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第2層	
21	土器器皿	復元口径 8.6 現存高 1.45	色調 内面 淡黃褐色(10YR 8/3) 外面 淡黃褐色(10YR 8/3) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第2層	
22	土器器皿	復元口径 10.2 器高 1.6	色調 内面 に近い褐色(5YR 6/4) 外面 橙色(7.5YR 7/6) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第3層	
23	土器器皿	復元口径 11.0 現存高 2.25	色調 内面 黄褐色(25Y 4/1) 外面 に近い黄褐色(10YR 6/4) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第2層	
24	土器器皿	復元口径 12.2 現存高 1.4	色調 内面 淡黃褐色(10YR 8/3) 外面 に近い黄褐色(10YR 7/3) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第3層	
25	土器器皿	復元口径 9.6 現存高 1.4	色調 内面 に近い黄褐色(10YR 7/4) 外面 に近い黄褐色(10YR 7/3) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第2層	
26	土器器皿	復元口径 11.4 器高 1.3	色調 内面 淡黃褐色(7.5YR 8/6) 外面 淡黃褐色(7.5YR 8/6) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 SK-302	
27	土器器皿	復元口径 8.2 現存高 1.5	色調 内面 黄褐色(10YR 8/6) 外面 に近い黄褐色(10YR 7/4) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第4層	
28	土器器皿	復元口径 27.4 現存高 3.6	色調 内面 に近い黄褐色(10YR 7/4) 外面 黒色(10YR 1.7/1) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第4層	
29	土器器皿	復元口径 27.0 現存高 7.9	色調 内面 淡黃褐色(7.5YR 8/4) 外面 黑色(N 2/1) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第4層	
30	瓦質土器 擂鉢	復元口径 27.8 現存高 7.1	色調 内面 淡黃色(25Y 7/2) 外面 淡黃色(25Y 7/2) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第4層	
31	瓦質土器 擂鉢	現存高 5.3	色調 内面 淡褐色(7.5Y 7/1) 外面 淡褐色(7.5Y 7/1) 地土 精良 焼成 良好	3次調査 第4層	

表7 潤城跡（第2次調査）出土鐵製品計測表（1）

持番号	名 称	寸 法(cm)			出 土 位 置	備 考
		全長(保存長)	幅(保存幅)	厚み(保存厚)		
32	鐵錐	(6.2)	3.75	0.6	2次調査 第1トレーナ 第3層	
33	鐵刀	(3.1)	1.75	0.6	2次調査 第1トレーナ 第1層	
34	鐵刀子	(11.6)	1.5	0.45	2次調査 第1トレーナ 第3層	
35	鐵刀子	(3.2)	1.1	0.5	2次調査 第1トレーナ 第3層	
36	鐵刀子	(5.5)	1.05	0.4	2次調査 第1トレーナ 掘土擲集	
37	鐵刀子	(3.95)	1.1	0.5	2次調査 第1トレーナ 第3層	
38	火打金	12.5	(3.3)	0.4	2次調査 第1トレーナ 第2層	
39	小札?	(2.9)	2.15	0.2	2次調査 第1トレーナ 第3層	
40	不明	(3.55)	2.6	0.5	2次調査 第1トレーナ 第2層	
41	不明	(3.0)	1.9	0.6	2次調査 第1トレーナ 第3層	
42	鐵刀子	(12.4)	1.45	0.4	2次調査 第1トレーナ 第1層	
43	鐵金具	2.5	2.5	0.2	2次調査 第3トレーナ 商業上~第1層	用途不明、鐵貨?
44	鐵錐	(4.1)	(2.4)	0.8	2次調査 第3トレーナ 第2層	
45	鐵錐	(7.45)	2.45	0.78	2次調査 第3トレーナ 第2層	

表8 澤城跡(第2次調査)出土鉄製品計測表(2)

博物番号	名称	全長 (現在長)cm	身部		頭部の 形態	出土位置	備考
			断面形態	寸法(cm)			
46	鉄釘	(2.6)	角	0.6 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
47	鉄釘	(2.7)	角	0.6 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
48	鉄釘	(2.9)	角	0.8 × 0.9	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
49	鉄釘	(4.3)	角	0.45 × 0.45	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
50	鉄釘	(3.4)	角	0.5 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
51	鉄釘	(3.7)	角	0.5 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
52	鉄釘	5.7	角	0.6 × 0.7	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
53	鉄釘	(5.2)	角	0.8 × 0.75	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
54	鉄釘	5.5	角	0.5 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
55	鉄釘	(3.3)	角	0.55 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
56	鉄釘	(4.7)	角	0.5 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
57	鉄釘	(2.5)	角	0.5 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
58	鉄釘	(2.8)	角	0.6 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
59	鉄釘	(2.8)	角	0.3 × 0.35	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
60	鉄釘	(2.4)	角	0.4 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
61	鉄釘	(2.5)	角	0.5 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
62	鉄釘	(3.1)	角	0.4 × 0.45	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2層	
63	鉄釘	(2.7)	角	0.3 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
64	鉄釘	4.6	角	0.45 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
65	鉄釘	(5.1)	角	0.5 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
66	鉄釘	(4.5)	角	0.45 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
67	鉄釘	(4.1)	角	0.4 × 0.3	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
68	鉄釘	(3.55)	角	0.5 × 0.7	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
69	鉄釘	(3.4)	角	0.4 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
70	鉄釘	(3.85)	角	0.5 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
71	鉄釘	(3.5)	角	0.5 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
72	鉄釘	(3.95)	角	0.5 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
73	鉄釘	(2.9)	角	0.55 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
74	鉄釘	(4.85)	角	0.7 × 0.65	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
75	鉄釘	(5.6)	角	0.6 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
76	鉄釘	(3.5)	角	0.65 × 0.65	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
77	鉄釘	(2.9)	角	0.6 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
78	鉄釘	(3.1)	角	0.6 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
79	鉄釘	(3.1)	角	0.45 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第2~3層	
80	鉄釘	(2.9)	角	0.4 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
81	鉄釘	(3.55)	角	0.45 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
82	鉄釘	(4.1)	角	0.55 × 0.65	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
83	鉄釘	(2.6)	角	0.55 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	

揮団番号	名称	全長 (現在長)cm	身部		横部の 形態	出土位置	備考
			断面形態	寸法(cm)			
84	鉄釘	(3.1)	角	0.6 × 0.75	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
85	鉄釘	(1.7)	角	0.42 × 0.45	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
86	鉄釘	(2.3)	角	0.65 × 0.7	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
87	鉄釘	(2.9)	角	0.4 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
88	鉄釘	(3.45)	角	0.6 × 0.55	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
89	鉄釘	(2.8)	角	0.5 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
90	鉄釘	(3.9)	角	0.65 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
91	鉄釘	(2.7)	角	0.4 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第1層	
92	鉄釘	(2.7)	角	0.85 × 0.8	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
93	鉄釘	(4.6)	角	0.5 × 0.7	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3～4層	
94	鉄釘	(10.6)	角	0.7 × 0.9	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
95	鉄釘	(2.2)	角	0.45 × 0.4	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
96	鉄釘	(3.7)	角	0.55 × 0.6	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
97	鉄釘	(3.25)	角	0.5 × 0.65	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
98	鉄釘	(5.0)	角	0.5 × 0.5	折り返し	2次調査 第1トレンチ 第3層	
99	鉄釘	(3.65)	角	0.55 × 0.75	L字形	2次調査 第1トレンチ 第3層	
100	鉄釘	(2.9)	角	0.5 × 0.5	L字形	2次調査 第1トレンチ 第3層	
101	鉄釘	(3.9)	角	0.45 × 0.7	L字形	2次調査 第1トレンチ 第3層	
102	鉄釘	(4.7)	角	0.55 × 0.45	折り返し	2次調査 第2トレンチ 第2層	
103	鉄釘	(4.3)	角	0.6 × 0.6	折り返し	2次調査 第2トレンチ 第2層	
104	鉄釘	(3.6)	角	0.4 × 0.5	折り返し	2次調査 第2トレンチ 第2層	
105	鉄釘	(3.6)	角	0.5 × 0.45	折り返し	2次調査 第2トレンチ 遷構面	
106	鉄釘	(2.5)	角	0.5 × 0.7	折り返し	2次調査 第2トレンチ 遷構面	
107	鉄釘	(5.7)	角	0.5 × 0.4	折り返し	2次調査 第2トレンチ 第4層(整地土)	
108	鉄釘	(3.5)	角	0.45 × 0.5	折り返し	2次調査 第2トレンチ 第4層(整地土)	
109	鉄釘	(3.7)	角	0.45 × 0.5		2次調査 第2トレンチ 第4層(整地土)	

表9 潭城跡（第3次調査）出土鉄製品計測表

揮団番号	名称	全長 (現在長)cm	身部		横部の 形態	出土位置	備考
			断面形態	寸法(cm)			
110	鉄釘	(13.8)	角	0.7 × 0.9	折り返し	3次調査 第4層	
111	鉄釘	(7.4)	角	0.4 × 0.5	折り返し	3次調査 第4層	
112	鉄釘	(5.65)	角	0.4 × 0.4	折り返し	3次調査 SD-301	

表 10 澤城跡（第2次調査）出土銅製品・鉛製品計測表

検査番号	名 称	寸法(cm)			出土位置	備考
113	銅 球	直径	21	断面径	0.3	2次調査 第1トレンチ 第3層
114	銅製金具	全長	3.8	幅	1.1 厚 0.6	2次調査 第1トレンチ 第3層 目貫金具?
115	銅製金具	現存長	3.1	現存幅	2.9 厚 0.1	2次調査 第1トレンチ 第3層 用途不詳
116	銅製金具	現存長	4.0	幅	1.5 厚 0.1	2次調査 第1トレンチ 第3層 火縄銃金具
117	銅製金具	現存長	9.4、8.4	幅	0.5 厚 0.1	2次調査 第1トレンチ 第3層 用途不詳
118	鉛 玉	直径	1.3			鉛塊玉

表 11 澤城跡（第2次・3次調査）出土銭寶計測表

検査番号	名 称	初鋳年(西暦)	文 字	銭径(外径)	出土位置	備考
119	乾元重寶	759		23mm	2次調査 第1トレンチ 第3層	
120	祥符元寶	1008		24mm	2次調査 第1トレンチ 第2層	
121	皇宋通寶	1039	真書体	23.5mm	2次調査 第1トレンチ 第3層	
122	皇宋通寶	1039	篆書体	24mm	2次調査 第1トレンチ 掘土	
123	熙寧通寶	1068	真書体	23mm	2次調査 第1トレンチ 第3層	
124	洪武通寶	1368			2次調査 第1トレンチ 第3層	
125	(不詳)				2次調査 第1トレンチ 第3層	
126	□□通寶			23mm	2次調査 第1トレンチ 第3層	
127	元豐通寶	1078	篆書体		3次調査 第1トレンチ 第4層	

表 12 澤城跡（第2次調査）出土砥石・石製品計測表

検査番号	名 称	砥石本体(現存)			出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)		
128	砥石	(2.2)	3.3	(0.6)	2次調査 第1トレンチ 第1層	
129	砥石	(3.4)	(2.5)	(0.6)	2次調査 第1トレンチ周辺 探集	
130	砥石	(4.7)	(1.2)	(0.9)	2次調査 第3トレンチ 第1層～第2層	
131	砾石	(6.7)	5.5	2.4	2次調査 第1トレンチ 第1層	

表 13 澤城跡（第2次調査）出土有溝砥石計測表

検査番号	名称	材質	砥石本体(現存)			面	溝(現存)			出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)		条数	幅(cm)	深さ(cm)		
133	有溝砥石	陶器	8.2	4.8	1.4	外面	2	10~11	0.5	2次調査 第1トレンチ 第3層	
						内面	2	11~12	0.5		
134	有溝砥石	陶器	3.7	3.9	1.0	外面	3	0.7~0.8	0.3	2次調査 第1トレンチ 掘土探集	
						内面	-	-	-		
135	有溝砥石	陶器	6.3	4.3	1.0	外面	2	0.9~1.0	0.2~0.3	2次調査 第1トレンチ 第3層	
						内面	-	-	-		
136	有溝砥石	陶器	5.3	3.1	0.8~0.9	外面	2	0.7~1.0	0.4	2次調査 第1トレンチ 第2層	
						内面	-	-	-		
137	有溝砥石	陶器	4.2	4.9	1.1	外面	2	0.8~1.0	0.4	2次調査 第1トレンチ 第3層	
						内面	2	0.7~0.8	0.3		
138	有溝砥石	陶器	5.0	1.5	1.0	外面	1	-	0.4	2次調査 第1トレンチ 掘土探集	
						内面	2	1.0	0.3		
139	有溝砥石	石	3.1	1.5	1.0	A面	1	-	0.5	2次調査 第1トレンチ 第3層	
						B面	1	-	0.3		



写真8 高山右近顕彰碑



写真9 沢城跡遠景

IV 澤城跡第4次調査

1 調査区と基本層序

第4次調査は、副郭北側の土塁で囲まれた平坦面と土塁の内側を確認調査の対象とし、南北にトレーナーを設定した。基本層序は、腐葉土・褐色土（第1層）、褐色土・明褐色土（第2層）、明褐色漿質土・明褐色土（第3層・整地土）となっている。遺構面は、第2層・第3層で確認している。なお、地表から遺構面までは、約30～40cmとなっている（図29・30、写真10・11）。

2 検出遺構

第1層・第2層を除去後、第3層上面を遺構面とする遺構群と土塁の一を確認した（図版7）。
土坑・ピット（図30・31）

14基の土坑・ピットを検出した。調査範囲が狭隘であることから、これらの遺構が獨立柱建物遺構となるかは、現段階では明らかにできない。

土塁（図5・30）

トレーナーを設定した北端での土塁高は、最大約2.6mを計り、南へとその高さを減じている。
土塁は地山成形によって下半部が形成（高さ約1.5m）されており、上半部には褐色土や明褐色土等（厚さ約20～40cm）を交互に盛っている。土塁下の地山面には、ピットの一部を確認している。



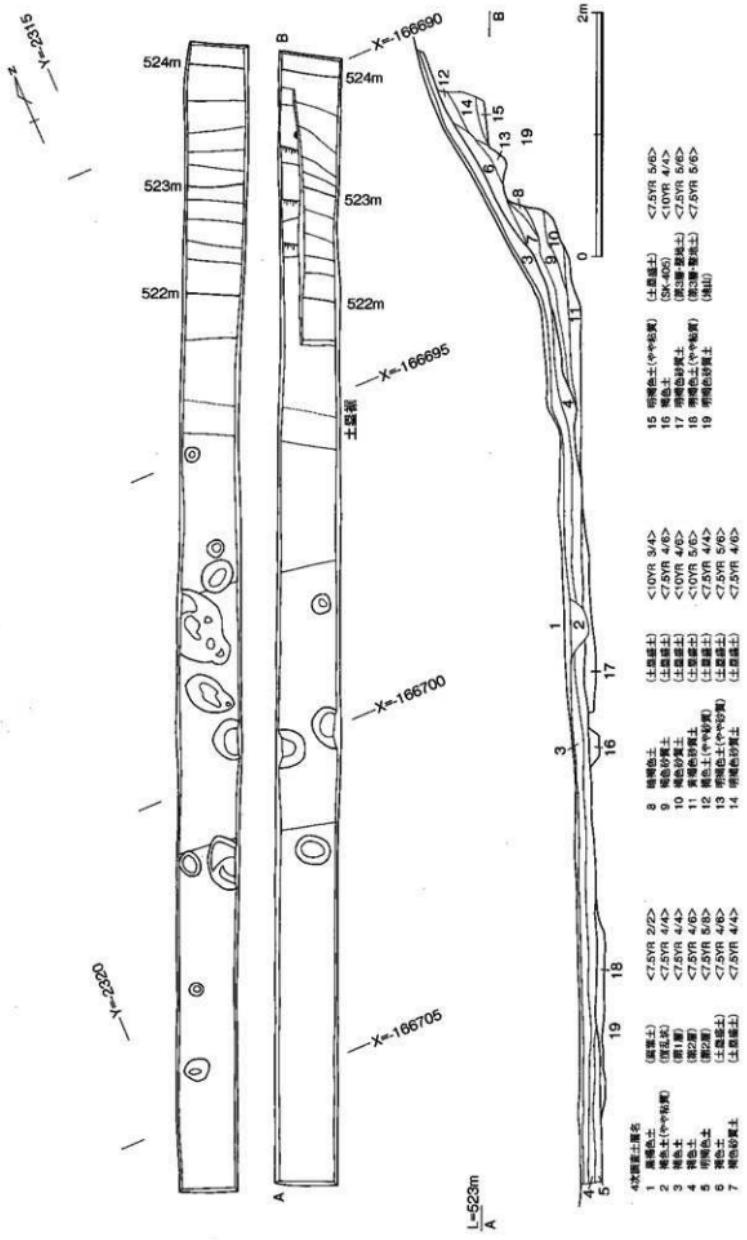
写真10 澤城跡(第4次調査) 平坦面土層断面



写真11 澤城跡(第4次調査) 土塁土層断面



図29 澤城跡(第4次調査) 基本層序模式図



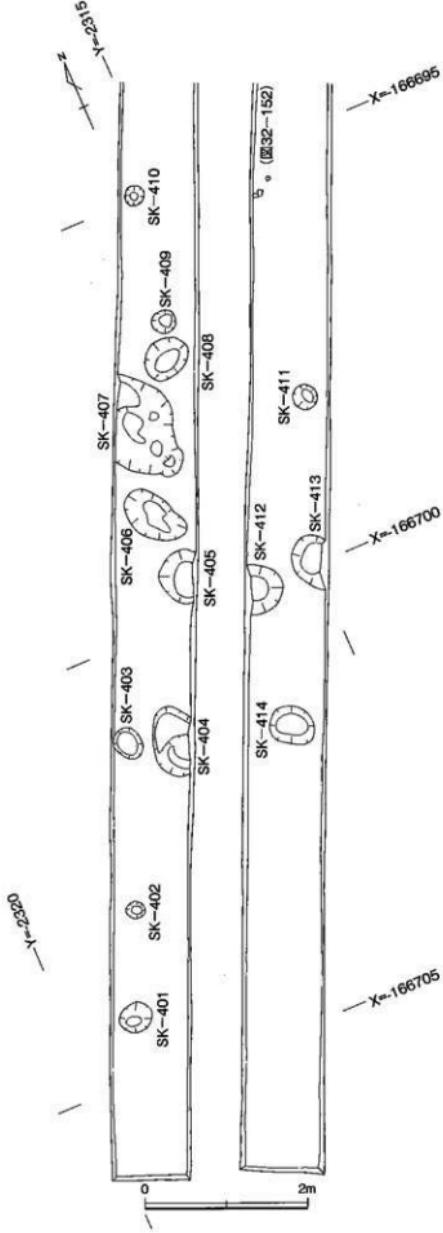


表 14 漢城跡(第4次調査)検出遺構一覧表

遺構名	旧遺構名	形態	規模 (m)	土質名 (地土)	出土遺物	備考
SK-401	SK-401	円形	径 20、深さ 7	褐色土	土器類(鉢)	
SK-402	SK-402	円形	径 11、深さ 7	褐色土		
SK-403	SK-403	円形	径 16~20、深さ 7	褐色土		
SK-404	SK-404	円形	径 27×17~44、深さ 17	褐色土		
SK-405	SK-405	円形	径 34、深さ 23	褐色土		遺物番号 154
SK-406	SK-06	椭円形	径 25×42、深さ 15	褐色土	土器類(II)、鐵貨(唐宋元朝)	遺物番号 165
SK-407	SK-07	椭円形	径 50×70以上、深さ 26	褐色土	瓦質土器類(II)、鐵釘	遺物番号 163
SK-408	SK-08	円形	径 24×28、深さ 11	褐色土	土器類(III)	
SK-409	SK-09	円形	径 14、深さ 6	褐色土		
SK-410	SK-10	円形	径 11、深さ 6	褐色土		
SK-411	SK-11	円形	径 15、深さ 5	褐色土		
SK-412	SK-12	円形	径 30、深さ 19	褐色土	土器類(III)、X質土器(Ⅲ)	
SK-413	SK-13	円形	径 30、深さ 15	褐色土		
SK-414	SK-14	円形	径 24×29、深さ 6	褐色土		

図 31 漢城跡(第4次調査) 遺構平面図

3 出土遺物

表14にまとめたように土師器、瓦質土器、鉄釘、鉄滓、銭貨（聖宋元寶）、モモ核などが出土している。また、第1～2層からも土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、鉄釘等が出土している。細片が多いものの、16世紀第3四半期の範疇で捉えることができるものと思われる。

(1) 土器（図32、表15、図版12）

146～148・154は土師器皿である。復元口径は146が7.4cm、147が8.0cm、148が10.6cmである。154はSK-405出土で、復元口径は12.4cmである。149はミニチュアの鉢で、復元口径5.4cmである。

150は大和型の土釜である。151は鍋で、把手の付け根部分の破片である。

152は美濃焼の天目茶碗で、口径11.2cm、高台径4.6cm、器高6.0cmである。高台内は削り込まれる。高台周辺を除き、銷釉が施される。

153は須恵質の擂鉢片である。内面には10条以上を1単位とする擂目が認められる。

155・156は、瓦質土器甕である。155は復元口径27.0cmで、SK-412上面からの出土である。

157は白磁碗である。復元口径12.8cmで、口縁端部は外反する。

(2) 鉄製品（図33、表16）

鉄釘は28点が出土しているが、その頭部の形態が明確な7点（158～164）のみを登載している。

頭部の形態は折り返しによるものが大半（158～161、163・164）を占め、L字形を呈するものは1点（162）である。163はSK-406出土、164は土壠盛土出土である。

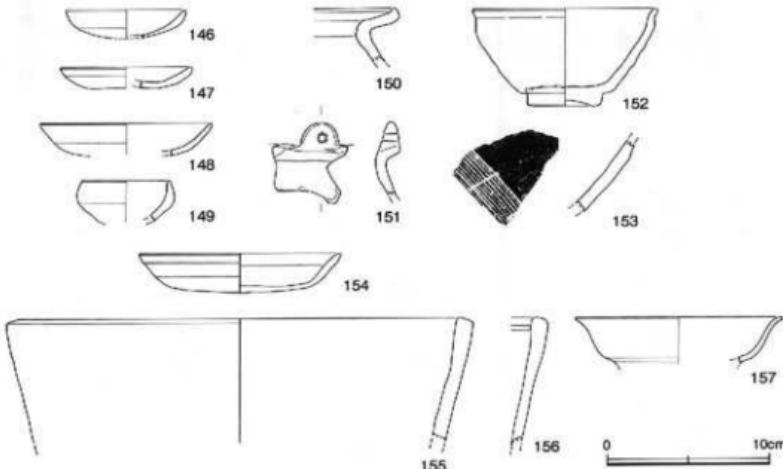


図32 津城跡（第4次調査）出土土器実測図

(3) 銭貨 (図 34、表 17、図版 12)

165 は、聖宗元寶である。SK-406 からの出土である。

(4) その他の遺物 (図版 12)

SK-407 から炭化したモモ核 1 点が出土している。

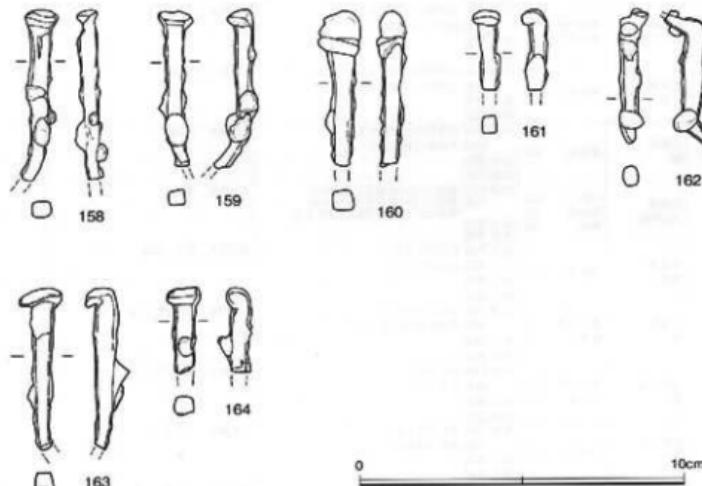


図 33 澤城跡（第 4 次調査）出土鉄製品実測図



図 34 澤城跡（第 4 次調査）出土銭貨拓影

表 15 潤城跡（第4次調査）出土土器観察表

擇団番号	器種	法量(cm)	色調・胎土・焼成	出土位置	備考
146	土器器皿	復元口径 現存高	7.4 1.7 色調 内面 浅黄褐色(10YR 8/4) 外面 にびい黄褐色(10YR 7/4) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 掘土 採集	
147	土器器皿	復元口径 器高	8.0 1.3 色調 内面 にびい褐色(7.5YR 7/4) 外面 にびい褐色(7.5YR 7/4) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 第1層	
148	土器器皿	復元口径 現存高	10.6 1.95 色調 内面 にびい黄褐色(10YR 7/4) 外面 黄灰褐色(10YR 4/2) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 第1層	
149	土器器皿(ミニチュア)	復元口径 現存高	5.4 2.5 色調 内面 浅黄褐色(10YR 8/4) 外面 浅褐色(7.5YR 4/3) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 第2層	
150	土器器皿	現存高	3.25 色調 内面 浅黄褐色(7.5YR 8/6) 外面 浅黄褐色(7.5YR 8/6) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 第2層	
151	土器器皿	現存高	4.5 色調 内面 浅黄褐色(10YR 8/4) 外面 黄褐色(10YR 3/2) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 第1層	
152	盃燒灰 天目系統	口径 高台径 器高	11.2 4.5 6.0 色調 内面 (物産)にびい赤褐色(5YR 4/4) 外面 (物産)にびい赤褐色(5YR 4/4) (釉色なし)にびい赤褐色(5YR 5/4) 胎土 鮎良 焼成 略級	4次調査 第2層	
153	須恵質 擂鉢	現存高	4.1 色調 内面 灰色(5Y 5/1) 外面 灰色(5Y 6/1) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 掘土 採集	
154	土器器皿	復元口径 器高	12.4 2.4 色調 内面 灰色(7.5YR 7/6) 外面 明黄褐色(10YR 7/6) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 SK-405 上面	
155	瓦質土器 甕	復元口径 現存高	27.0 7.6 色調 内面 灰色(N5/5) 外面 灰色(N5/5) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 SK-412 上面	
156	瓦質土器 甕	現存高	7.9 色調 内面 黒色(N15/0) 外面 黒色(N15/0) 胎土 鮎良 焼成 良好	4次調査 上层土	
157	白磁 碗	復元口径 現存高	12.8 2.9 色調 内面 淡白色(10Y 8/1) 外面 淡白色(10Y 8/1) 胎土 鮎良 焼成 略級	4次調査 土层土	

表 16 潤城跡（第4次調査）出土鐵製品計測表

擇団番号	名称	全長 (現存長)cm	身部		頭部の 形態	出土位置	備考
			断面形態	寸法(cm)			
158	鉄釘	(5.2)	角	0.5 × 0.55	折り返し	4次調査 第1層	
159	鉄釘	(4.8)	角	0.45 × 0.45	折り返し	4次調査 第2層	
160	鉄釘	(4.8)	角	0.6 × 0.65	折り返し	4次調査 第2層	
161	鉄釘	(4.45)	角	0.5 × 0.4	折り返し	4次調査 第2層	
162	鉄釘	4.2	角	0.6 × 0.45	L字形	4次調査 第2層	
163	鉄釘	(5.0)	角	0.5 × 0.55	折り返し	4次調査 SK-407	
164	鉄釘	(2.6)	角	0.6 × 0.6	折り返し	4次調査 土层土	

表 17 潤城跡（第4次調査）出土錢貨計測表

擇団番号	名 称	初鑄年(西暦)	文 字	錢徑(外径)	出土位置	備考
165	聖宋元寶	1101	真書体	22mm	4次調査 SK-406	

V 小 結

I 澤城と周辺の城

澤城は、以前から主郭（西郭）群と副郭（東郭）群とでは、土星の有無をはじめ、郭の構造等の相違が指摘されている。現在、見ることができる澤城の遺構の大半は、永祿3年（1560）以降の松永久秀方（高山飛騨守団書）の改修によるものと推定されている。

この頃の城内の様子を伝える史料としては、ルイス＝フロイスの『日本史』がある。これによると、城は高い山の上にあり、遠くまで眺望でき、城内には、高山団書の妻子や約300人の兵たちが住む。小さな砦には、長さ20m弱、幅7m余りの教会があり、中には礼拝堂・香部屋・宣教師の宿泊部屋・従者の間などの施設がある。一方、伊賀へと逃れた澤氏は、澤城を奪還しよう企てており、澤城では、昼夜不断の用心深い見張りがなされており、城門も設けていることがわかる。城内における具体的な建物配置は不明であるが、高山氏は、城主であった永祿3年（1560）から永祿10年（1567）までの間、山城で居住し、守りを固めていたことを窺い知ることができ、副郭（東郭）群の土星、深い堀切などは、澤氏の攻撃に備えて造られたと考えられる。一方、当初の主郭（西郭）群は、澤氏の手によるものと考えられるが、高山氏によって主郭を中心とした居住空間が整備されたことが推察される。なお、『日本史』にある教会は、その規模からすると主郭西方の郭内に設けられた可能性が考えられる。

澤城に近接した米山城や籠の平井城、三官寺城は、郭に土星をめぐらす構造から松永氏方の陣城であつたことが指摘されている。また、澤中城は、初期澤城の陣城的な可能性も考えられる。

澤城跡第1次調査及び第4次調査において土星の構築状況の一部を確認したが、土星の下半部はいずれも地山成形によってその基礎が形成されており、郭の築造当初から土星をめぐらせていたことがわかる。先の指摘によるならば、副郭（東郭）群は、澤氏ではなく、松永氏方（高山氏）による築城の可能性が高い。

澤城の築城は、北畠氏勢力が宇陀に及んだ正平8年（1353）頃とも言われる。具体的な時期は、明らかでないが、主郭（西郭）群の主郭では、15世紀から16世紀の上器片を採集しており、現在、見ることができる本格的な築城は、この頃とも推定される。先述のとおり主郭（西郭）群は、主郭を中心に展開し、山城としてある程度の求心性が認められる。

永祿10年（1567）から澤氏が澤城に戻ることとなる。天正10年（1582）年に伊賀衆を匿ったことにより、織田信雄より澤城の取り壊しを命じられることとなるが、その伊賀衆を下城（下城・馬場遺跡）で討首にし、澤城は存続することとなる。しかし、蒲生氏郷の与力となった天正13年（1585）には澤城は廃城となったと考えられる。

第2次～4次調査において、築城時期を明らかにできる遺構・遺物は確認していないが、出土土器の時期（16世紀第3四半期）から澤城の存続時期の一端を明らかにすることことができた。若干の遺構（礎石建物、土坑、ピット、溝）を確認しているが、調査範囲が限られていたこともあり、現段階では、その全容を明らかにできない。ルイス＝フロイスの『日本史』にある礼拝堂・香部屋・宣教師の宿泊部屋・従者の間などの施設は、高山団書や右近らの行動から、主郭西側の調査地周辺の可能性が高いが、今後の課題としておきたい。また、瓦片の出土から小規模な瓦葺建物の存在も推定されるが、その詳細は不明である。

2 城下の様相

澤氏の居館は、遺構・遺物から下城・馬場遺跡であったと考えられ、12世紀後半には、居館として成立し、以後、16世紀後半にいたるまでその機能を有していたことは先述のとおりである。居館は南側には沢川、西側には下北川、東には尾根を配し、自然地形が防御機能の一翼を担っている。なお、馬場の東側には城戸の存在を推定できる「二木戸」といった小字が残る。

断片的な発掘調査ではあるが、最も広い平坦面からは、2時期の礎石建物を検出し、多量の土師器や輸入陶磁器等も出土している。平坦面全体における具体的な建物配置は明らかでないが、これらの礎石建物は、この居館における主要施設であることは疑いない。これらの礎石建物は、いずれも焼失しているが、文献にこの焼失と関係あると思われる記事をみることができる。『満済准后日記』

正長2年（1429年）2月24日条によると「衆徒国民等、宇多の廻へ責め入る。澤・秋山一矢に及ばず、自焼せしめ没落す。」とある。澤・秋山の両氏が興福寺勢力に攻められ、自焼没落していることがわかる。「自焼」とは、「自らが家などの建物を焼く」という風習で、ある種の作法といわれている。「没落」とは、「城などの建物が敵に奪われる」、あるいは、「建物を維持できなくなったため、それまでの拠点を離れる」といった意味と解されている。

澤氏は、ほぼ一貫して、ここを居館としており、小字や地形等から澤氏の居館周囲には近親屋敷や馬場が想定できる（図35）。下城東方の沢川近くに「池殿奥」といった小字名をみることができる。これは、澤氏の同名衆であった池氏の関係する小字名と考えられ、池氏の館は下城の東辺付近にあったとも推定できる。高山氏は、下城には居を構えておらず、その機能を山上にもっていっている。当時の様子は、『日本史』にあるとおりである。高山氏時代の下城の様子は明らかにできないが、澤氏が再び城主となってからは、その居館として再び機能し、天正13年（1585）年まで存続したと推定される。

3 澤城への道

城下から澤城へと至る道は、沢の谷を登る道と大貝の谷を登る道が想定できる。前者の下城（居館）前を通るルートは大手道、後者の大貝氏の本拠地を通るルートは揚手道と考えられる。大手道は下城から大手道の門門（大手口）とも推定される曲輪群を経て、城の南斜面へ至る。この斜面は過去に崩落したこともあり、ここからの詳細は明らかにできないが、西曲輪群の主郭南裾の小曲輪に取り付く可能性が考えられる。



図35 澤城跡と城下概念図

近親者以外の居住域は、遺物の散布状況から、大手道に沿った尾根間に想定できる。現在の住宅地と重なる部分が多い。

寺院や墓地は、基本的に沢川南側や下城から山を隔てた所に展開している。墓は副葬品や立地から階層差が認められ、単独立地する墓は、澤氏集団との関連が指摘されているところである。澤氏の菩提寺については、集落内における立地から常念寺または洞泉寺が考えられるが、詳細は今後の課題としたい。

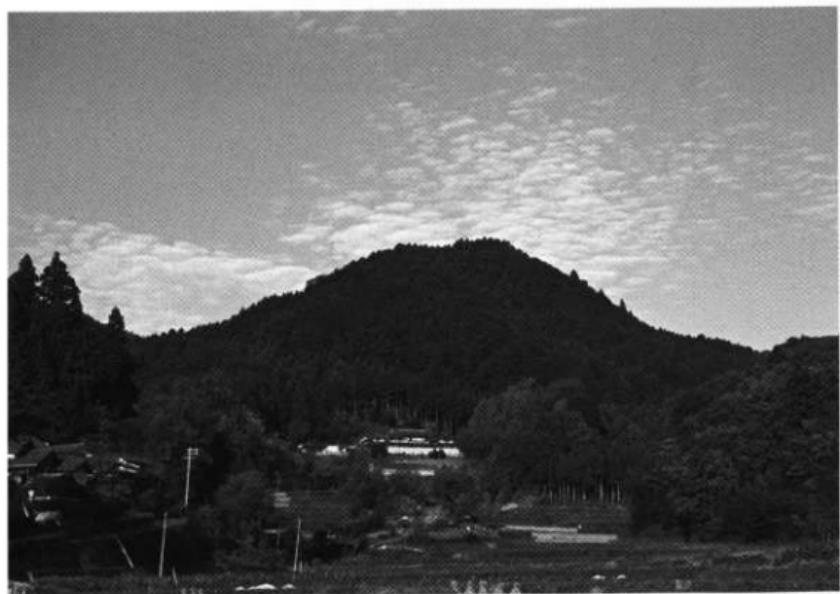
参考文献

- 柳谷武夫訳 1965『日本史 2』 平凡社
 柳谷武夫訳 1966『日本史 3』 平凡社
 横原町史編集委員会 1993『榛原町史 本編』榛原町役場
 横原町史編集委員会 1991『榛原町史 史料編』榛原町役場
 大字陀町史編集委員会 1992『新訂 大字陀町史』大字陀町
 村田修三他 1980『奈良県』「日本城郭大系 第10巻」新人物往来社
 大門貞夫 1992『沢氏および沢城をめぐるキリストン』
 宇田川武久 1979『鉄炮と石火仗』日本の美術390号 至文堂
 西山 克 1986『戦国大名北畠氏の権力構造－特に大和宇陀郡内一揆との関係から－』『近畿大名の研究』吉川弘文館
 多田暢久 1995『織豊系城郭以前』『奈良史学 第13号』奈良大学史学会
 伊達宗泰 1998『宇陀地方にみる三城館跡』『櫻原考古学研究所論集 第13』吉川弘文館
 中澤克昭 1999『中世の武力と城郭』吉川弘文館
 河内一浩 1999『楓米の玉づくり一根来寺出土の陶片軸用砥石の解釈をめぐってー』『紀伊通信』第26号
 齋澤良佑 2002『瀬戸・美濃大窯場年の再検討』『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
 金松誠 2001『三好・松永方城郭の陣城プランー松永方の大和口宇陀侵攻における陣城を通じてー』『城郭研究論集』発刊準備号 仮称城館学会
 金松誠 2008『戦国期における大和口宇陀地域の城館構成と縄張技術』『城館史料学』第6号 城館史料学会
 柳澤一宏 2003『大和澤城跡とその城下』『続文化財学論集』文化財論集刊行会
 奈良県教育委員会 1988『野山遺跡群I』
 奈良県教育委員会 1989『野山遺跡群II』
 奈良県立櫻原考古学研究所 1989『奈良県遺跡調査概報 1988年度』
 横原町教育委員会 1994『榛原町遺跡分布地図』1993年度
 横原町教育委員会 1993『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』1992年度
 横原町教育委員会 1999『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』1997年度
 横原町教育委員会 2003『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』2001年度
 横原町教育委員会 2006『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』2004年度
 宇陀市教育委員会 2008『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』2006年度
 宇陀市教育委員会 2009『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』2007年度
 宇陀市教育委員会 2010『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』2008年度

表18 澤氏・澤城略年表

西暦	年号	澤氏・澤城のできごと（一部）	日本のできごと（一部）
1156	久寿 3	『澤氏古文書』の記載がはじまる。	保元の乱
1192	建久 3		源頼朝、鎌倉幕府を開く
1336	建武 3		南北朝時代がはじまる
1338	延元 3		足利尊氏、室町幕府を開く
1353	正平 8	伊勢国司・北畠顕能勢力、宇陀地方へ及ぶ。 この頃、澤城築城か。	
1354	正平 9		北畠親房、死去
1392	元中 9		南北朝時代が終わる
1415	応永 22	澤泰廉、3代伊勢国司・北畠満雅から神戸六郎（松阪市）の検断権を認められる。	北畠満雅の挙兵
1428	正長 1		正長の土一揆
1429	正長 2	幕府方の興福寺大乗院が宇陀を攻撃。澤泰廉ら伊勢へ逃れる。	
1430	永享 2	澤氏、北畠氏の支援で旧地にもどる。	
1450	宝徳 2	澤廉満、笠間・陽雲寺へ大般若経六百巻を寄進。	
1466	文正 1	澤家惣領が定まらず、以後、椿牧氏が一族を統率。	
1467	応仁 1		応仁の乱（～1477）
1484	文明 16	諸木野をめぐり澤氏と秋山氏が争い、澤氏が破れる。 (筒井氏と越智氏の争いが宇陀へも波及)	
1490	延徳 2	澤方満、澤家惣領として国司より正式に認められる。 (この頃、澤氏の全盛時代)	
1560	永祿 3	松永久秀、澤城を攻撃。 高山飛騒守岡書・右近父子が沢城へ入城。<右近8歳> 澤大菊丸（のち房満）、伊賀へ逃れる。	桶狭間の戦い
1563	6	高山飛騒守岡書、洗礼を受ける（洗礼名 タリヨ）。	
1564	7	高山右近、城内で洗礼を受ける（洗礼名 ジュスト）。	
1567	10	高山氏、澤城から撤退。澤源五郎（のち房満）、澤城へもどる。	
1573	天正 1		室町幕府が終わる
1576	4		伊勢国司・北畠氏滅亡
1577	5	澤房満、織田信雄の配下となる。	
1581	9	澤房満・源六、織田氏の伊賀攻めに加わる。	
1582	10	澤源六、伊賀衆を匿ったことにより、織田信雄より澤城の取り壊しを命じられるが、伊賀衆を下城で討首にし、存続。	本能寺の変
1585	13	澤源六、蒲生氏郷の与力となる。この頃、澤城魔城となる。	羽柴秀吉、關白となる
1590	18		豊臣秀吉、全国統一
1595	文禄 4	澤源六、豊臣秀長から高市郡内で2000石の知行を与えられる。	
1600	慶長 5	澤左平次、石出峯（西軍）に加わる。	関ヶ原の戦い
1601	慶長 6	初代 澤隼人、藤堂高虎に仕える。（近世武士への転化、家格安定）	

図 版



澤城跡遠景（大貝集落から）



澤城跡遠景（沢集落から）



第2次調査第1トレンチ遺構検出状況（南から）



第2次調査第1トレンチ遺構検出状況（北から）



第2次調査第1トレンチ遺構検出状況（東から）



第2次調査第1トレンチ土層断面（北西から）



第2次調査第2・3トレンチ遺構検出状況（東から）



第2次調査第2・3トレンチ遺構検出状況（西から）



第2次調査第3トレンチ遺構検出状況（西から）



第2次調査第3トレンチ遺構検出状況（北から）



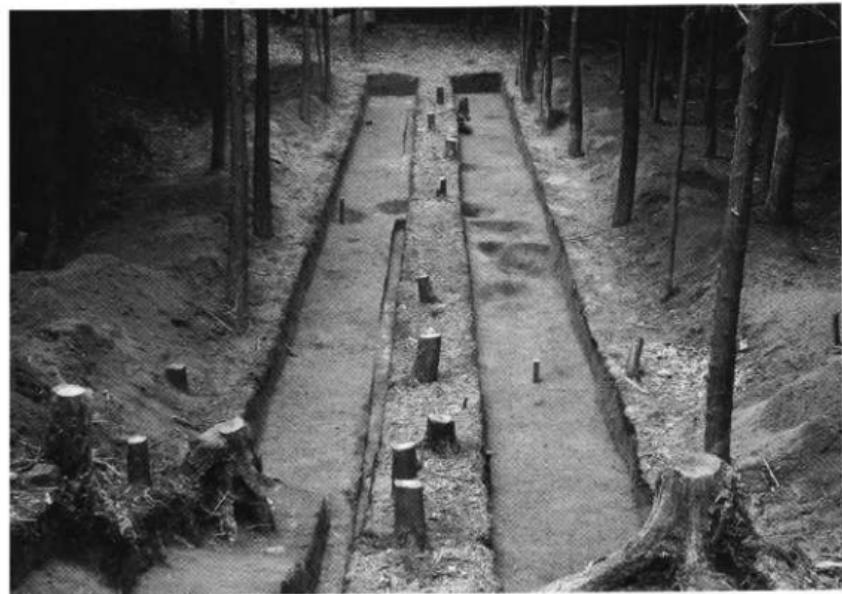
第3次調査遺構検出状況（西から）



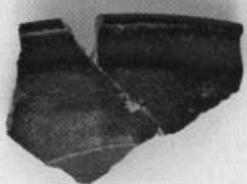
第3次調査遺構検出状況（東から）



第4次調査遺構検出状況（南から）



第4次調査遺構検出状況（北から）



1



5



3



5



8



12



11



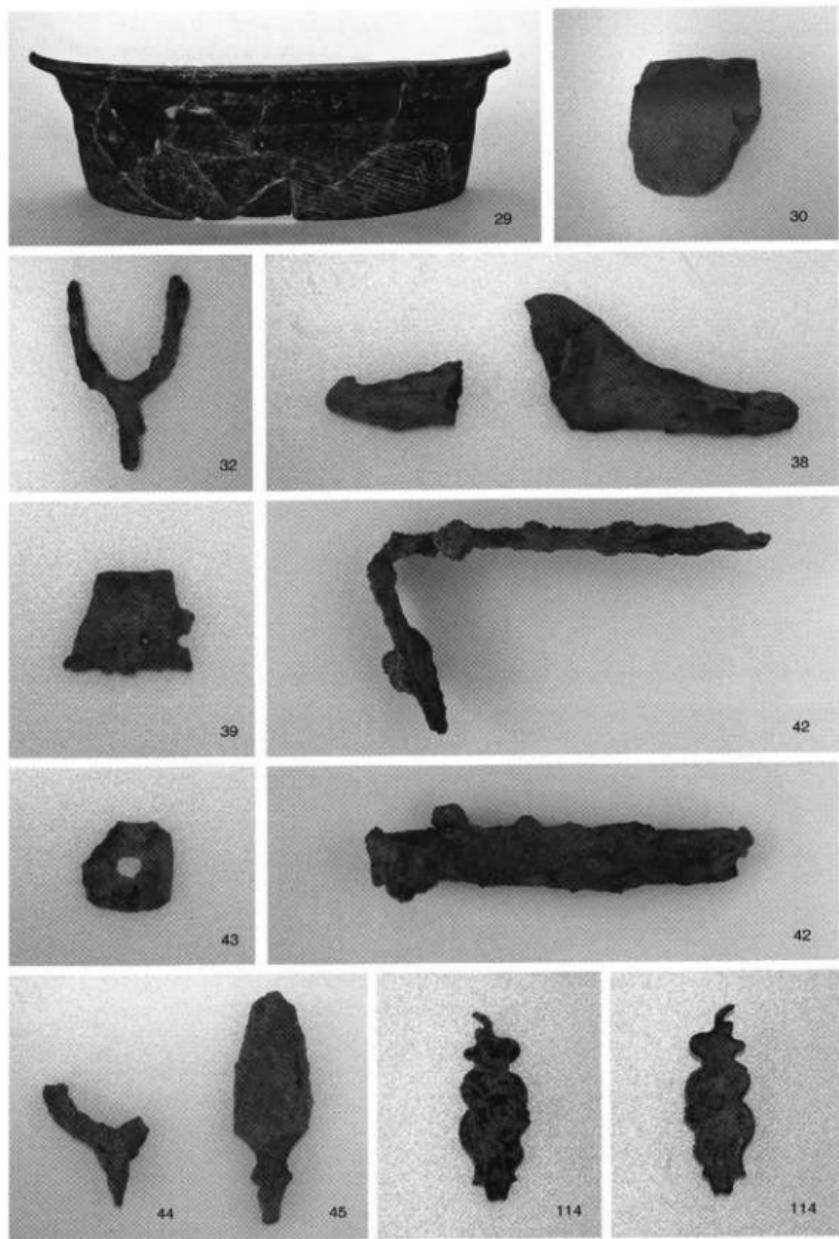
12



14



17



出土遺物



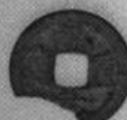
113



116



118



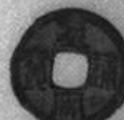
119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



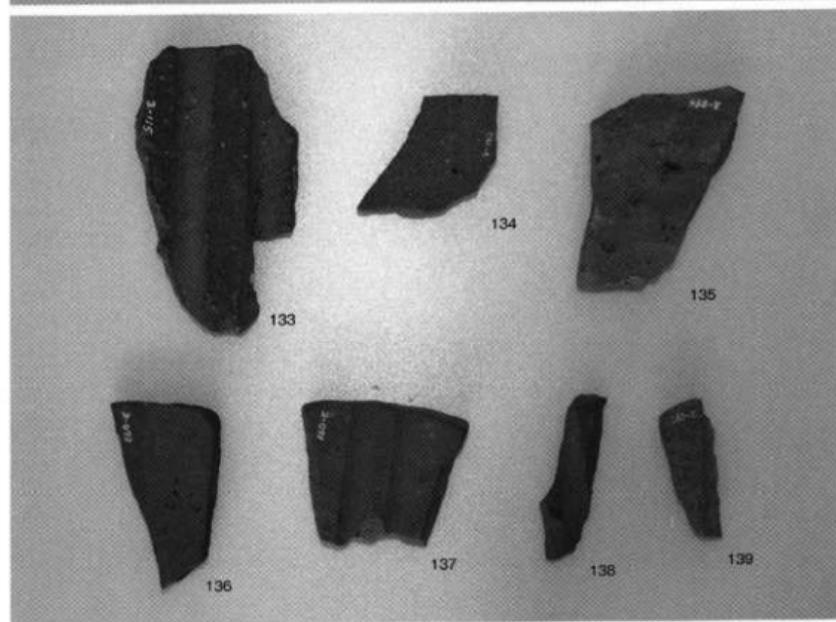
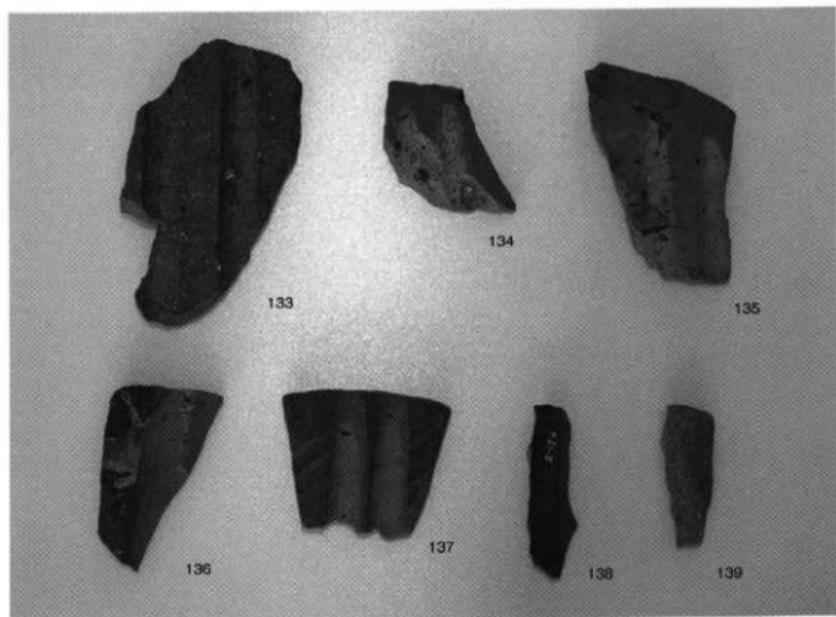
131

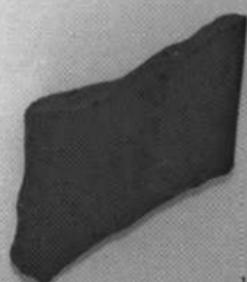
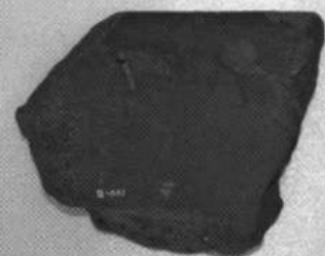


132



132





報告書抄録

ふりがな						
書名	澤城跡第2次～4次発掘調査報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名	宇陀市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第2集					
編著者名	柳澤一宏					
編集機関	宇陀市教育委員会 文化財保存課					
所在地	〒633-2164 奈良県宇陀市大字陀拾生 1846番地 Tel. 0745-87-2274					
発行年月日	西暦 2011年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地(旧名)	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面積(m ²) 調査原因
澤城跡 (第2次調査)	奈良県宇陀市株原区 大貝 302、303番地	29212-5		34度 29分 59秒	135度 58分 14秒	2004.3.10～2004.3.31 2005.8.1～2005.8.10 2005.3.10～2005.3.31 154 範囲確認調査
澤城跡 (第3次調査)	奈良県宇陀市株原区 大貝 302、303番地	29212-5		34度 29分 59秒	135度 58分 14秒	2007.3.19～2007.3.30 2007.6.1～2007.6.21 22 範囲確認調査
澤城跡 (第4次調査)	奈良県宇陀市株原区 大貝 299番地	29212-5		34度 30分 02秒	135度 58分 19秒	2008.3.10～2008.3.31 2008.5.1～2008.6.13 2008.11.20 28 範囲確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
澤城跡 (第2次調査)	城跡	中世	礎石、集石、 土坑、ピット	サヌカイト、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、大形土製品、瓦、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、銅製金具、錢貨、ガラス、ガラス滓、砥石、有溝砥石、軽石、壁土他		
澤城跡 (第3次調査)	城跡	中世	礎石	土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、鐵釘、鐵滓、錢貨（元豊通宝）他		
澤城跡 (第4次調査)	城跡	中世	土坑、ピット	土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、鐵釘、鐵滓、錢貨（聖宋元宝）、種子他		

澤城跡第2次～4次発掘調査報告書

宇陀市文化財調査報告書 第2集

2011年3月31日 発行

編集 宇陀市教育委員会事務局 文化財保存課
奈良県宇陀市大字陀生1846番地

発行 宇陀市教育委員会

印刷 株式会社明新社
奈良市南京終3丁目464番地